第１２章

ドゥルヴァ・マハーラージャ、神のもとへ帰る

第１節

मैत्रेय उवाच

ध्रुवं निवृत्तं प्रतिबुद्ध्य वैशसा-
दपेतमन्युं भगवान् धनेश्वरः ।
तत्रागतश्चारणयक्षकिन्नरैः
संस्तूयमानो न्यवदत्कृताञ्जलिम् ॥ १ ॥

マイトゥレーヤ　ウヴァーチャ
maitreya uvāca

ドゥフルヴァンム　ニヴリッタンム　プラティブッデャハ　ヴァイイシャサードゥ
dhruvaṁ nivṛttaṁ pratibuddhya vaiśasād

アペータ・マニュンム　バハガヴァーン　ダハネーシュヴァラハ
apeta-manyuṁ bhagavān dhaneśvaraḥ

タトゥラーガタシュ　チャーラナ・ヤクシャ・キンナライヒ
tatrāgataś cāraṇa-yakṣa-kinnaraiḥ

サンムストゥーヤマーノー　ニャヴァダトゥ　クリターンジャリンム
saṁstūyamāno nyavadat kṛtāñjalim

maitreyaḥ uvāca—マイトゥレーヤが言った; *dhruvam*—ドゥルヴァ・マハーラージャ; *nivṛttam*—終えた; *pratibuddhya*—知って; *vaiśasāt*—殺害することを; *apeta*—静まって; *manyum*—怒り; *bhagavān*—クヴェーラ; *dhana-īśvaraḥ*—財宝の管理者; *tatra*—そこに; *āgataḥ*—現われた; *cāraṇa*—チャーラナによって; *yakṣa*—ヤクシャ族; *kinnaraiḥ*—そしてキンナラによって; *saṁstūyamānaḥ*—崇拝されて; *nyavadat*—語った; *kṛta-añjalim*—手を合わせているドゥルヴァに。

偉大な聖者マイトゥレーヤが言った。「ヴィドゥラよ。それまでの怒りが静まったドゥルヴァ・マハーラージャは、ヤクシャ族の殺害を完全に放棄した。財宝の管理者であり、高貴な気質をそなえたクヴェーラはこの知らせを聞き、ドゥルヴァのまえに姿を現わした。そして、ヤクシャ、キンナラ、チャーラナたちの崇拝を受けながら、合掌して立っているドゥルヴァ・マハーラージャに話しかけた」

第２節

धनद उवाच

भो भोः क्षत्रियदायाद परितुष्टोऽस्मि तेऽनघ ।
यत्त्वं पितामहादेशाद्वैरं दुस्त्यजमत्यजः ॥ २ ॥

ダハナダ　ウヴァーチャ
dhanada uvāca

ボホー　ボホーホ　クシャトゥリヤ・ダーヤーダ
bho bhoḥ kṣatriya-dāyāda

パリトゥシュトー　スミ　テー　ナガハ
parituṣṭo 'smi te 'nagha

ヤトゥ　トゥヴァンム　ピターマハーデーシャードゥ
yat tvaṁ pitāmahādeśād

ヴァイランム　ドゥスティャジャンム　アティャジャハ
vairaṁ dustyajam atyajaḥ

dhana-daḥ uvāca—財宝の管理者（クヴェーラ）が言った; *bhoḥ bhoḥ*—おお; *kṣatriya-dāyāda*—クシャトリヤの子息よ; *parituṣṭaḥ*—非常に嬉しい; *asmi*—私は～である; *te*—お前に対して; *anagha*—罪無き者よ; *yat*—なぜなら; *tvam*—お前; *pitāmaha*—お前の祖父; *ādeśāt*—その教えを受けて; *vairam*—敵意; *dustyajam*—捨てさることが困難な; *atyajaḥ*—放棄した。

財宝の管理者クヴェーラが言う。「罪なきクシャトリヤの子よ。祖父の教えにしたがっておまえが敵意を捨てさったことを聞き、私は心から嬉しく思っている。さぞかし困難な決断だったと思うが、そのようなおまえに、私はたいへん満足している」

第３節

न भवानवधीऽक्षान्न यक्षा भ्रातरं तव ।
काल एव हि भूतानां प्रभुरप्ययभावयोः ॥ ३ ॥

ナ　バハヴァーン　アヴァディヒードゥ　ヤクシャーン
na bhavān avadhīd yakṣān

ナ　ヤクシャー　ブラータランム　タヴァ
na yakṣā bhrātaraṁ tava

カーラ　エーヴァ　ヒ　ブーターナーンム
kāla eva hi bhūtānāṁ

プラブフル　アピャヤ・バハーヴァヨーホ
prabhur apyaya-bhāvayoḥ

na—ではない; *bhavān*—お前; *avadhīt*—殺した; *yakṣān*—ヤクシャ族; *na*—ではない; *yakṣāḥ*—ヤクシャ族; *bhrātaram*—兄弟; *tava*—お前の; *kālaḥ*—時; *eva*—確かに; *hi*—なぜなら; *bhūtānām*—生命体たちの; *prabhuḥ*—至高主; *apyaya-bhāvayoḥ*—破壊と発生の。

ほんとうは、おまえはヤクシャ族を殺したわけではないし、ヤクシャ族がおまえの弟を殺したわけでもない。発生と破壊の根本原因は、永遠なる時という至高主の力なのだから。

要旨解説

財宝の管理者はドゥルヴァ・マハーラージャを「罪なき者」と呼びましたが、数多くのヤクシャ族を殺したことで気がとがめていたドゥルヴァは、そう感じていなかったかもしれません。しかしクヴェーラはこの節で、おまえがヤクシャ族を殺したのではない、と断言しています。罪をおかしたわけではなかったのです。王としての義務を履行しただけのことであり、それは自然の法則に命じられたことでもあります。クヴェーラは言いました。「弟がヤクシャ族に殺されたとも考えてはならない。弟が死んだ、あるいは殺されたのは、自然の法則という力によるものだ。主の力のひとつである『永遠なる時』が、物事の破壊と発生の根本原因である。そのような作用の責任がおまえにあるのではない」。

第 4 節

अहं त्वमित्यपार्था धीरज्ञानात्पुरुषस्य हि ।
स्वाप्नीवाभात्यतद्ध्यानाऊया बन्धविपर्ययौ ॥ ४ ॥

アハンム　トゥヴァンム　イティ　アパールタハー　ディヒール
ahaṁ tvam ity apārthā dhīr

アギャーナートゥ　プルシャッシャ　ヒ
ajñānāt puruṣasya hi

スヴァープニーヴァーバハーティ　アタドゥ・デャーナードゥ
svāpnīvābhāty atad-dhyānād

ヤヤー　バンダハ・ヴィパリャヤウ
yayā bandha-viparyayau

aham—私; *tvam*—あなた; *iti*—そのように; *apārthā*—誤解された; *dhīḥ*—知性; *ajñānāt*—無知から; *puruṣasya*—人物の; *hi*—確かに; *svāpni*—夢; *iva*—〜のように;

ābhāti—見える; *a-tat-dhyānāt*—肉体観念の生活から; *yayā*—それによって; *bandha*—束縛; *viparyayau*—そして苦しみ。

肉体観念にもとづいて自分と他者を「私」と「あなた」と考える誤認は、無知から生じる。この肉体観念こそが誕生と死の繰りかえしの原因であり、それが私たちを物質存在に縛りつづける。

要旨解説

Ahaṁ tvam（アハンム　トゥヴァンム）、すなわち「私」とか「あなた」というまちがった概念は両者を区別する見方であり、最高人格主神との永遠の絆を忘れるために生じます。至高の人物クリシュナはすべての中心となる方であり、手や足が体全体の部分であるように、だれもが主の部分体です。自分と至高主が永遠にむすばれていると理解すれば、肉体観念にもとづく区別感はなくなります。同じ例を挙げることができます。手は手、足は足ですが、どちらも体全体のために使われていれば、「手」や「足」という区別はなくなります。すべてが体全体にぞくするからであり、そのように機能している各部が体全体を構成しているのです。同じように、生命体がクリシュナ意識にいれば、だれもが主に仕えているから「私」とか「あなた」という区別はなくなります。主は絶対的な方ですから、主への奉仕も絶対的です。手がそれなりに機能し、足もそれなりに機能をしていても、目的は最高人格主神ですから、すべてはひとつです。ほんとうの知識とは、手は手、足は足、体は体などとは区別できても、全体から見ればひとつである、ということです。自分は自由である、と生命体が考えるときから物質存在という条件づけられた状態が始まります。ですから、「私は主と分離して存在している」という概念は夢にすぎません。私たちは、クリシュナ意識という自分本来の立場にもどらなくてはなりません。それができてこそ、物質的束縛から解放されるのです。

第５節

तद्गच्छ ध्रुव भद्रं ते भगवन्तमधोक्षजम् ।
सर्वभूतात्मभावेन सर्वभूतात्मविग्रहम् ॥ ५ ॥

タドゥ　ガッチャハ　ドゥヴルヴァ　バハドゥランム　テー
tad gaccha dhruva bhadraṁ te

バハガヴァンタンム　アドホークシャジャンム
bhagavantam adhokṣajam

サルヴァ・ブゥータートゥマ・バハーヴェーナ
sarva-bhūtātma-bhāvena

サルヴァ・ブゥータートゥマ・ヴィグラハンム
sarva-bhūtātma-vigraham

tat—ゆえに; *gaccha*—来る; *dhruva*—ドゥルヴァ; *bhadram*—幸運; *te*—お前に; *bhagavantam*—最高人格主神に; *adhokṣajam*—物質的な感覚の概念を超えた方; *sarva-bhūta*—全生命体; *ātma-bhāvena*—それらを一つと考えることで; *sarva-bhūta*—全生命体の中に; *ātma*—至高魂; *vigraham*—姿を持っている。

ドゥルヴァよ。こちらへ進みでよ。主がいつもおまえに幸運をさずけてくださるように。我々の感覚的概念を超えた最高人格主神は全生命体の至高魂であるため、どのような生物でもひとつであり、違いはない。ゆえに、全生命体が身をよせる究極の人物である主の崇高な姿に奉仕をするのだ。

要旨解説

この節の*vigraham*（ヴィグラハンム）「特別の姿を持っている」ということばは、絶対真理者が究極的に最高人格主神であることを指しているため、重要な意味があります。そのことは『ブラフマ・サムヒター』（第５章・第１節）で *sac-cid-ānanda-vigrahaḥ*（サチ・チドゥ・アーナンダ・ヴィグラハハ）と謳われています。主は姿を持っていますが、その姿はどのような物質的な体とも違っています。生命体は至高の姿から生じた中間勢力です。そのため、至高の姿と違いはないのですが、同時に、その至高の姿と同じであるとも言えません。ドゥルヴァ・マハーラージャはこの節で、至高の姿に奉仕をするよう助言を受けています。たとえば、木にも姿があり、その木の根に水を注げば、ほかの姿——葉、枝、花、くだもの——にもおのずと水がゆきわたります。マーヤーヴァーダが言う、「絶対真理はすべてを包括しているのだから、主に姿はないはずである」とする考え方は、この節で否定されています。反対に、「絶対真理者には姿がある、しかしなおかつ遍在している」と確証されています。主から離れているものはなにもないのです。

第６節

भजस्व भजनीयाङ्घ्रिमभवाय भवच्छिदम् ।
युक्तं विरहितं शक्त्या गुणमय्यात्ममायया ॥ ६ ॥

バハジャスヴァ　バハジャニーヤーングァリンム
bhajasva bhajanīyāṅghrim

アバハヴァーヤ　バハヴァ・チヒダンム
abhavāya bhava-cchidam

ユクタンム　ヴィラヒタンム　シャクテャー
yuktaṁ virahitaṁ śaktyā

グナ・マイヤートゥマ・マーヤヤー
guṇa-mayyātma-māyayā

bhajasva—献愛奉仕に励む; *bhajanīya*—崇拝されるにふさわしい; *aṅghrim*—蓮華の御足を持つ主に; *abhavāya*—物質存在からの解放のために; *bhava-chidam*—物質的束縛の結び目を切断する方; *yuktam*—執着して; *virahitam*—離れて; *śaktyā*—主の勢力に; *guṇa-mayyā*—物質自然の様式で構成されている; *ātma-māyayā*—想像を絶する主の勢力によって。

だからこそ、主への献愛奉仕に没頭するのだ。主だけが我々を物質存在の束縛から解放させられるからである。主は自分の物質勢力に執着してはいるものの、その勢力の作用とは離れている。物質界に起こるすべては、最高人格主神の想像を絶する力によって生じているのである。

要旨解説

前節からつづき、とくにこの節で述べられているのは、ドゥルヴァ・マハーラージャは献愛奉仕をしなくてはならない、という点です。その奉仕は、最高人格主神の姿のないブラフマンに向けてすることはできません。「献愛奉仕をせよ」という意味の*bhajasva*（バハジャスヴァ）ということばが使われるとき、それは、奉仕をする者、奉仕、そして奉仕を受ける者がいることを指しています。最高人格主神が奉仕を受ける側で、主を喜ばせる活動を奉仕といい、その奉仕をする者が召し使い、と呼ばれます。それが『バガヴァッド・ギーター』でも*mām ekaṁ śaraṇaṁ vraja*（マーンム　エーカンム　シャラナンム　ヴラジャ）と確証されています。至高主の手や足に比較される半神に仕える必要はありません。至高主が奉仕を受ければ、至高主の手や足もおのずと奉仕を受けるのです。分けて奉仕をする必要はない、ということです。『バガヴァッド・ギーター』（第12章・第７節）では*teṣām ahaṁ samuddhartā mṛtyu-saṁsāra-sāgarāt*（テーシャーンム　アハンム　サムッダハルター　ムリテュ・サンムサーラ・サーガラートゥ）と言われ、これは「主は献愛者に特別な好意をしめすために、最後には物質存在の束縛から解放されるよう献愛者を心のうちから導く」という意味です。至高主だけが生命体をこの物質界の束縛から救うことができるのです。物質エネルギーは最高人格主神のさまざまな勢力の表われであり、そのことは*parāsya śaktir vividhaiva śrūyate*（パラーッシャ　シャクティル　ヴィヴィダハイヴァ　シュルーヤテー）（『チャタンニャ・チャリタームリタ』マデャ、第13章・第65節、要旨解説）と表現されています。物質エネルギーは主の勢力のひとつであり、それは熱と光が火の持つ勢力であるのと同じです。物質エネルギーと至高主神は違った存在ではありませんが、同時に、主は物質エネルギーとまったくかかわっていません。中間勢力である生命体は、物質界を支配しようとする望みのために物質エネルギーのなかに落としいれられています。主はこのことから離れているのですが、生命体が主に献愛奉仕をすれば、やがてその奉仕に執着するようになります。この状態を*yuktam*（ユクタンム）と言います。献愛者にと

って主は物質エネルギーのなかにでさえ存在しています。これが、主の想像を絶する勢力です。物質エネルギーは物質界の三様式のなかで機能し、それが物質存在の動・反動を作りだします。献愛者でない人々はそのような活動に巻きこまれていきますが、自分の行動を最高人格主神の意志と一致させる献愛者たちは、物質エネルギーのそのような動・反動から自由になっていきます。ですから、主はこの節で*bhava-cchidam*（バハヴァ・チヒダンム）、すなわち「物質存在の束縛から解放する方」と述べられています。

第７節

वृणीहि कामं नृप यन्मनोगतं
मत्तस्त्वमौत्तानपदेऽविशङ्कितः ।
वरं वरार्होऽम्बुजनाभपादयो-
रनन्तरं त्वां वयमृ। शुश्रुम ॥ ७ ॥

ヴリニーヒ　カーマンム　ヌリパ　ヤン　マノー・ガタンム
vṛṇīhi kāmaṁ nṛpa yan mano-gataṁ

マッタス　トゥヴァンム　アウッターナパデー　ヴィシャンキタハ
mattas tvam auttānapade 'viśaṅkitaḥ

ヴァランム　ヴァラールホー　ンムブジャ・ナーバハ・パーダヨール
varaṁ varārho 'mbuja-nābha-pādayor

アナンタランム　トゥヴァーンム　ヴァヤンム　アンガ　シュシュルマ
anantaraṁ tvāṁ vayam aṅga śuśruma

vṛṇīhi—どうか求めてほしい；*kāmam*—望み；*nṛpa*—王よ；*yat*—なんでも；*manaḥ-gatam*—心の中にある；*mattaḥ*—私から；*tvam*—お前；*auttānapade*—マハーラージャ・ウッターナパーダ王の子息よ；*aviśaṅkitaḥ*—ためらうことなく；*varam*—恩恵；*vara-arhaḥ*—恩恵を授かるにふさわしい；*ambuja*—蓮華の花；*nābha*—その方の臍；*pādayoḥ*—主の蓮華の御足に；*anantaram*—つねに；*tvām*—お前について；*vayam*—私たち；*aṅga*—ドゥルヴァよ；*śuśruma*—～と聞いた。

マハーラージャ・ウッターナパーダ王の子、ドゥルヴァ・マハーラージャよ。私はおまえが、蓮華の臍を持つ方として知られる最高人格主神にたえず愛情奉仕をしていると聞いた。ゆえに、おまえは私からどのような恩恵でもさずかるにふさわしい人物である。ためらうことなく、望むものを私に求めるがよい。

要旨解説

ウッターナパーダ王の子息であるドゥルヴァ・マハーラージャは、いつも主の蓮華の御足を思う主の偉大な献愛者として全宇宙でその名が知られていました。そのような純粋無垢な献愛者は、半神からあらゆる恩恵をさずかるにふさわしい美質をそなえています。恩恵をさずかるために、クリシュナとは別に半神を崇拝する必要はありません。クヴェーラは半神の財宝を管理しており、ドゥルヴァ・マハーラージャに対して、望む恩恵があればなんでも言うように、と求めています。そのことについて、シュリーラ・ビルヴァマンガラ・タークラは、「主に献愛奉仕をしている人物には、すべての物質的恩恵があたかも侍女のように控えている」と表現しています。ムクティ・デーヴィー（Mukti-devī）が、解脱を与えるために献愛者の家の扉のまえで待っている、いつなんどきでも、というのです。つまり、献愛者になればおのずと高尚な境地に到達する、ということです。最高人格主神に崇高な愛情奉仕をするだけで、世界中のあらゆる恩恵を、とくにその恩恵を得るために努力しなくてもさずかることができます。主クヴェーラは、ドゥルヴァ・マハーラージャがつねにサマーディ（*samādhi*）「主の蓮華の御足を考えている境地」にあったと聞いている、と言っています。言いかえるとクヴェーラは、ドゥルヴァ・マハーラージャにとって物質界ではなにも欲しいものがないことを知っていた、ということです。ドゥルヴァが、いつも至高主の蓮華の御足をいつも思っているという恩恵以外は欲しがらないことも知っていたのです。

第８節

मैत्रेय उवाच

स राजराजेन वराय चोदितो
ध्रुवो महाभागवतो महामतिः ।
हरौ स वव्रेऽचलितां स्मृतिं यया
तरत्ययत्नेन दुरत्ययं तमः ॥ ८ ॥

マイトゥレーヤ　ウヴァーチャ
maitreya uvāca

サ　ラージャ・ラージェーナ　ヴァラーヤ　チョーディトー
sa rāja-rājena varāya codito

ドゥヴルヴォー　マハー・バハーガヴァトー　マハー・マティヒ
dhruvo mahā-bhāgavato mahā-matiḥ

ハラウ　サ　ヴァヴレー　チャリターンム　スムリティンム　ヤヤー
harau sa vavre 'calitāṁ smṛtiṁ yayā

タラティ　アヤトゥネーナ　ドゥラテャヤンム　タマハ
taraty ayatnena duratyayaṁ tamaḥ

maitreyaḥ uvāca—偉大な聖者マイトゥレーヤが言った; *saḥ*—彼; *rāja-rājena*—王の中の王（クヴェーラ）によって; *varāya*—恩恵に対して; *coditaḥ*—聞かれて; *dhruvaḥ*—ドゥルヴァ・マハーラージャ; *mahā-bhāgavataḥ*—一流の純粋な献愛者; *mahā-matiḥ*—もっとも知的あるいは思慮深い; *harau*—最高人格主神に; *saḥ*—彼; *vavre*—尋ねた; *acalitām*—揺るぎない; *smṛtim*—記憶; *yayā*—それによって; *tarati*—渡りきる; *ayatnena*—困難なく; *duratyayam*—超えることのできない; *tamaḥ*—無知。

偉大な聖者マイトゥレーヤがことばをつづけた。「ヴィドゥラよ。知的で思慮深い王であり、そしてもっとも高尚かつ純粋な献愛者であるドゥルヴァ・マハーラージャは、ヤクシャラージャ（ヤクシャ族の王）から恩恵を受けいれるよう求められたとき、最高人格主神に対するゆるぎない信念と記憶がさずかるよう願った。そうすれば、ふつうの魂にはとうてい渡れない無知の海を、たやすく渡りきることができるからである」

要旨解説

ヴェーダの儀式に熟達した従者たちは、さまざまなタイプの恩恵が宗教性、経済発展、感覚満足、解脱に応じて用意されている、と言います。この４つの原則はチャトゥル・ヴァルガ（*catur-varga*）という名前で知られています。そのなかでも、解脱の恩恵は物質界でもっとも高いものとされています。物質界の無知を渡りきることが最高の*puruṣārtha*（プルシャールタ）「人類への恩恵」です。しかしドゥルヴァ・マハーラージャは、その最高の恩恵プルシャールタさえ凌ぐ恩恵、すなわち主の蓮華の御足をいつも思っていられるように、という恩恵を求めました。その境地をパンチャマ・プルシャールタ（*pañcama-puruṣārtha*）といいます。このパンチャマ・プルシャールタという主の献愛奉仕に没頭するだけの境地に入った献愛者には、４つのプルシャールタ・解脱が些細なことに思えてきます。シュリーラ・プラボーダーナンダ・サラスヴァティーはこのことに関連して、献愛者にとって解脱は地獄のような境地でしかない、と言います。献愛者は、感覚満足という天国の惑星で得られる生活を蜃気楼のようなもの、すなわちなんの価値もないものと考えるからです。ヨーギーたちは感覚を抑制しようと努力しますが、献愛者は感覚の制御に苦労しません。感覚はヘビと比較されますが、献愛者にとってヘビの毒牙は折れています。そのためシュリーラ・プラボーダーナンダ・サラスヴァティーは、物質界で得られる恩恵を分析したうえで、純粋な献愛者にとってはどれも無価値であると断言しています。ドゥルヴァ・マハーラージャはマハー・バーガヴァタ（*mahā-bhāgavata*）「一流の献愛者」であり、はかりしれない知性・マハー・マティ（*mahā-matiḥ*）をそなえています。優れた知性がなければ献愛奉仕、すなわちクリシュナ意識をはじめることはできません。一流の献愛者なら一流の知性をそなえた人物なのですから、物質界で得られる恩恵には見むきもしません。ドゥルヴァ・マハーラージャは、

王のなかの王から恩恵を受けとるよう求められました。半神の財宝の管理者・クヴェーラの唯一の奉仕は、物質界にいる人々に巨万の富をさずけることであり、この節では王のなかの王、と呼ばれています。それは、クヴェーラに祝福されなければだれも王にはなれないからです。その王のなかの王が、欲しいだけの富をさずけようと申しでているのですが、ドゥルヴァ・マハーラージャはことわりました。そのために、ドゥルヴァはここで、マハー・マティ、ひじょうに思慮深い、あるいは知的である、と呼ばれています。

第９節

तस्य प्रीतेन मनसा तां दत्त्वैडविडस्ततः ।
पश्यतोऽन्तर्दधे सोऽपि स्वपुरं प्रत्यपद्यत ॥ ९ ॥

タッシャ　プリーテーナ　マナサー
tasya prītena manasā

ターンム　ダットゥヴァイダヴィダス　タタハ
tāṁ dattvaiḍaviḍas tataḥ

パッシャトー　ンタルダデヘー　ソー　ピ
paśyato 'ntardadhe so 'pi

スヴァ・プランム　プラテャパデャタ
sva-puraṁ pratyapadyata

tasya—ドゥルヴァに; *prītena*—大いに喜んで; *manasā*—そのような心理で; *tām*—その記憶; *dattvā*—授けて; *aiḍaviḍaḥ*—イダヴィダーの子、クヴェーラ; *tataḥ*—そのあと; *paśyataḥ*—ドゥルヴァが見ているあいだに; *antardadhe*—消えた; *saḥ*—彼（ドゥルヴァ）; *api*—もまた; *sva-puram*—自分の都市に; *pratyapadyata*—戻った。

イダヴィダーの子、主クヴェーラは大いに満足し、ドゥルヴァが求めた恩恵を喜んでさずけた。そしてドゥルヴァのまえから姿を消し、ドゥルヴァ・マハーラージャも自分の都に帰っていった。

要旨解説

イダヴィダー（Iḍaviḍā）の子として知られるクヴェーラは、ドゥルヴァ・マハーラージャが物質的に楽しめるものを求めなかったことに心から満足しました。クヴェーラは半神ですから、「なぜドゥルヴァ・マハーラージャは半神から恩恵をさずかったのか」と詰問する人がいるかもしれません。それは、ヴァイシュナヴァにとって、クリシュナ意識に高められるものであれば、半神から恩恵をさずかることをことわる理由はないからです。たとえばゴ

ーピーたちは、カーテャーヤニー（Kātyāyanī）という女神を崇拝しましたが、それはクリシュナを夫として迎えるというたったひとつの恩恵を女神に求めたからです。ヴァイシュナヴァは半神から恩恵をさずかることや、最高人格主神から恩恵をさずかることにも関心はありません。『シュリーマド・バーガヴァタム』で言われているように、解脱は至高者からさずけられるものであっても、純粋な献愛者はその恩恵をうけとるつもりはありません。ドゥルヴァ・マハーラージャはクヴェーラに、精神界に移されるという解脱さえ求めませんでした。どこにいようと——精神界であろうと物質界であろうと——いつも最高人格主神を思っていられるように、と願ったのでした。ヴァイシュナヴァはいつでも、だれにでも敬意をしめします。ですから、クヴェーラがドゥルヴァに恩恵をさずけようとしたとき、ドゥルヴァはその申し出をことわりませんでした。望んだのは、クリシュナ意識を高めてくれる恩恵だったのです。

第１０節

अथायजत यज्ञेशं क्रतुभिर्भूरिदक्षिणैः ।
द्रव्यक्रियादेवतानां कर्म कर्मफलप्रदम् ॥ १० ॥

アタハーヤジャタ　ヤギェーシャンム
athāyajata yajñeśaṁ

クラトゥビヒル　ブフーリ・ダクシナイヒ
kratubhir bhūri-dakṣiṇaiḥ

ドゥラヴァ・クリヤー・デーヴァターナーンム
dravya-kriyā-devatānāṁ

カルマ　カルマ・パハラ・プラダンム
karma karma-phala-pradam

atha—そのあと; *ayajata*—彼は崇拝した; *yajña-īśam*—儀式の主; *kratubhiḥ*—儀式によって; *bhūri*—盛大な; *dakṣiṇaiḥ*—慈善によって; *dravya-kriyā-devatānām*—さまざまな道具、活動、半神たちをともなう儀式の; *karma*—対象者; *karma-phala*—活動の結果; *pradam*—報いる方。

ドゥルヴァ・マハーラージャは、宮殿に住んでいるときは、すべての儀式を楽しむ方・最高人格主神を喜ばせるために盛大な儀式を数多く執行した。ヴェーダで定められた儀式は、儀式の対象者であり、また結果としての恩恵をさずけてくださる主ヴィシュヌを喜ばせるためにある。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』（第３章・第９節）では、*yajñārthāt karmaṇo 'nyatra loko 'yaṁ karma-bandhanaḥ*（ヤギャールタハートゥ　カルマノー　ニャトゥラ　ローコー　ヤンム　カルマ・バンダハナハ）「至高主を喜ばせるためだけに活動すべきである、さもなければ活動の結果に束縛される」と言われています。ヴァルナ（*varṇa*）とアーシュラマ（*āśrama*）という４つの区分によると、クシャトリヤとヴァイシャはとくに、盛大な儀式をし、たくわえた財産を寛大に分けあたえるよう勧められています。ドゥルヴァ・マハーラージャは王として、また理想的なクシャトリヤとしてそのような儀式を執行し、寛大な慈善をほどこしています。クシャトリヤとヴァイシャは、お金をかせぎ、できるだけ多くの財産をたくわえようとします。しかしときには、それを悪事で実行しようとします。クシャトリヤは国を治めなくてはなりません。ドゥルヴァ・マハーラージャも、その任務を遂行するなかでヤクシャ族と戦い、殺さなくてはなりませんでした。そのような行動はクシャトリヤには必要なことです。クシャトリヤは臆病者であってはなりませんし、非暴力であってもなりません。国を治めるには容赦なく戦わなくてはならないのです。

ですから、クシャトリヤもヴァイシャも、たくわえた財産の少なくとも50パーセントを慈善として差しだすよう勧められています。『バガヴァッド・ギーター』では、放棄階級の生活に入っても、ヤギャ（*yajña*）、ダーナ（*dāna*）、タパッシャ（*tapasya*）を捨ててはならない、と説かれています。どれも放棄してはなりません。タパッシャは放棄生活者のために用意されています。世俗の暮らしを捨てた人々は、タパッシャ、すなわち改悛と苦行をしなくてはなりません。物質界に住む人々、クシャトリヤ、ヴァイシャは慈善をする義務があります。ブラフマチャーリーは、その生活の始めにさまざまなヤギャを執行しなくてはなりません。

ドゥルヴァ・マハーラージャは理想的な王でしたから、慈善をほどこして自分の財産をほとんど使いはたしています。本来、王は市民の税金を集めてたくわえた富を感覚満足に使うためにいるのではありません。世界の君主制は、王が市民から集めた財産を感覚満足のために使いはじめたときに崩壊しました。もちろん、君主制度でも民主主義でも、同じ堕落は今もつづいています。民主政府にもさまざまな政党がありますが、党員たちは地位を守ることや政党の権力維持に奔走しています。政治家は国民の幸せをほとんど考えていません。市民は所得税、消費税、その他もろもろの税金という形の重税にあえいでいます。ときには収入の80から90パーセントを税金として徴収され、その税金は役人や大臣たちの高給に惜しみなく充てられています。以前は、市民から集められた税金はヴェーダ経典が定める盛大な儀式のために使われていました。しかし現代は、どのような儀式も執行できなくなっているため、シャーストラは、サンキールタナ・ヤギャ（*saṅkīrtana-yajña*）を勧めています。世

帯者なら、どのような地位にあっても、お金を使わずにサンキールタナ・ヤギャができます。家族がいっしょに座り、手をたたき、ハレー・クリシュナ・マハー・マントラを歌うことができます。だれでもこのヤギャができますし、人々にプラサーダを配ることもできます。カリ時代にはそれだけで十分です。クリシュナ意識運動はこの原則にもとづいています。つまり、いつも、できるだけ、寺院の外でも中でもハレー・クリシュナを唱え、できるかぎりプラサーダを配る方法です。この方法は、国の財産を作っている指導者との協力があってこそ推進されます。寛大なプラサーダとサンキールタンだけで、全世界が平和と繁栄に包まれるのです。

ヴェーダ経典で勧められている物質的な儀式には、ふつう半神への捧げ物が含まれています。この半神崇拝は、知性に欠ける人々にとくに用意されているものですが、じっさいは儀式の結果を最高人格主神ナーラーヤナに捧げなくてはなりません。主クリシュナは『バガヴァッド・ギーター』（第5章・第29節）で*bhoktāraṁ yajña-tapasām*（ボホークターランム　ヤギャ・タパサーンム）と述べています。主がすべての儀式を楽しむ方です。その主の別名をヤギャ・プルシャ（Yajña-puruṣa）といいます。

ドゥルヴァ・マハーラージャは偉大な献愛者で、そのような儀式に固執する必要はありませんでしたが、臣民に模範をしめすために多くの儀式を執行し、自分の富を慈善として分けあたえました。世帯者として生きていたあいだ、感覚満足のために財産を使ったことは一度たりともありません。この節にある*karma-phala-pradam*（カルマ・パハラ・プラダンム）ということばはひじょうに重要です。主はだれにでも、望むとおりに、さまざまなカルマを与えます。主はすべての生命体の心にいる至高魂であり、だれがなにを望んでも、その便宜を提供するほど優しく、寛大な方です。そして、その行動の結果は、行動した生命体自身が楽しみます。物質自然界を楽しみたい、支配したい、と思う人に、主はその便宜をすべて提供しますが、行動者はその結果に縛られます。同じように、献愛奉仕に没頭したいと望む人にも主は便宜をすべて与え、献愛者はその結果を楽しみます。そのため主は、*karma-phala-pradam*（カルマ・パハラ・プラダンム）と知られています。

第１１節

सर्वात्मन्यच्युतेऽसर्वे तीव्रौघां भक्तिमुद्वहन् ।
ददर्शात्मनि भूतेषु तमेवावस्थितं विभुम् ॥ ११ ॥

サルヴァートゥマニ　アチュテー　サルヴェー
sarvātmany acyute 'sarve

ティーヴラウガハーンム　バハクティンム　ウドゥヴァハン
tīvraughāṁ bhaktim udvahan

ダダルシャートゥマニ　ブゥーテーシュ
dadarśātmani bhūteṣu

タンム　エーヴァーヴァスティヒタンム　ヴィブゥンム
tam evāvasthitaṁ vibhum

sarva-ātmani—至高魂に; *acyute*—完全無欠; *asarve*—限界のまったくない; *tīvra-oghām*—揺るぎない力で; *bhaktim*—献愛奉仕; *udvahan*—している; *dadarśa*—彼は見た; *ātmani*—至高の精神魂の中に; *bhūteṣu*—全生命体の中に; *tam*—主を; *eva*—だけ; *avasthitam*—位置されて; *vibhum*—あらゆる力を持つ。

ドゥルヴァ・マハーラージャは不屈の力で、万物の源である至高者に愛情奉仕をした。主にそのように仕えていたとき、すべてが主のうちだけにあり、主がすべての生命体のうちにいることを目のあたりにした。主は、献愛者を守る、という主要な義務をかならず遂行することから、アチュタ（Acyuta）と呼ばれる。

要旨解説

ドゥルヴァ・マハーラージャは数多くの儀式を執行しただけではなく、献愛奉仕をするという超越的義務も遂行しています。行動の結果を楽しみたいと思っているふつうのカルミー（*karmī*）は、ヴェーダのシャーストラ（*śāstra*）で定められている儀式や祭式だけに関心を持っています。ドゥルヴァ・マハーラージャは模範的王として多くの儀式をおこないましたが、献愛奉仕にも励んでいました。主は、身をゆだねた献愛者をかならず守ります。献愛者はすべての人の心にいる主を見ることができ、それは『バガヴァッド・ギーター』（第18章・第61節）で、*īśvaraḥ sarva-bhūtānāṁ hṛd-deśe 'rjuna tiṣṭhati*（イーシュヴァラハ　サルヴァ・ブゥーターナーンム　フリドゥ・デーシェー　ルジュナ　ティシュタハティ）と言われているとおりです。一般の人々は、至高主が全生物の心にいることを理解できませんが、献愛者はじっさいに主を見ることができます。外に見るだけでなく、精神的視力によって、すべては最高人格主神のうちにある事実を見ることができます。そのことは『バガヴァッド・ギーター』（第９章・第４節）で*mat-sthāni sarva-bhūtāni*（マトゥ・スタハーニ　サルヴァ・ブゥーターニ）と言われています。それがマハー・バーガヴァタ（*mahā-bhāgavata*）の見方です。だれもが見ていることを見ていますが、ただ木、山、都市、空などをばくぜんと見るのではなく、すべては主のうちにあるからこそ、自分の崇拝している主をすべてのなかに見ます。これがマハー・バーガヴァタの見方です。要約すれば、高尚かつ純粋な献愛者であるマハー・バーガヴァタは、主をどこにでも、すべての心の内にでも見ている、ということです。これは、主に気高い奉仕をしている献愛者だけにできることです。『ブラフマ・サムヒター』（第5章・第38節）で*premāñjana-cchurita-bhakti-vilocanena*（プレーマーンジャナ・チュッリタ・バハクティ・ヴィローチャ

ネーナ）と言われているように、自分の目に神への愛情という膏（こう）を塗った人物は、どこにでも至高主を見て、主と顔を合わせることができます。それは、想像しても、ありきたりの瞑想をしてもできることではありません。

第１２節

तमेवं शीलसम्पन्नं ब्रह्मण्यं दीनवत्सलम् ।
गोप्तारं धर्मसेतूनां मेनिरे पितरं प्रजाः ॥ १२ ॥

タンム　エーヴァンム　シーラ・サンムパンナンム
tam evaṁ śīla-sampannaṁ

ブラフマニャンム　ディーナ・ヴァトゥサランム
brahmaṇyaṁ dīna-vatsalam

ゴープターランム　ダハルマ・セートゥーナーンム
goptāraṁ dharma-setūnāṁ

メーニレー　ピタランム　プラジャーハ
menire pitaraṁ prajāḥ

tam—彼に；*evam*—そのように；*śīla*—神聖な気質で；*sampannam*—与えられて；*brahmaṇyam*—ブラーフマナに敬意を払って；*dīna*—貧しい者に；*vatsalam*—親切な；*goptāram*—保護者；*dharma-setūnām*—宗教原則の；*menire*—思い；*pitaram*—父親；*prajāḥ*—市民。

ドゥルヴァ・マハーラージャはあらゆる神聖な質にめぐまれていた。至高主の献愛者に敬意をはらい、貧しい者や罪のない者にもこのうえなく優しく、宗教原則を守った人物である。このような気質をそなえたドゥルヴァ・マハーラージャは、市民たちすべてに父親として慕われていた。

要旨解説

この節で述べられているドゥルヴァ・マハーラージャの人となりは、神聖な王がそなえた模範的気質です。王にかぎらず、現代民主主義や政府の指導者たちも、このような神聖な気質をそなえなくてはなりません。そうすれば、国民たちも幸せに暮らすことができます。この節ではっきりと述べられているように、市民はドゥルヴァ・マハーラージャを父親と考えていました。子どもが頼もしい父親に身をゆだねるように、国や王に守られた市民は、あらゆる面で満たされた生活ができます。しかし今では、生活や財産の保証といった不可欠なことさえ政府は確保してくれません。

このことに関連して、ひじょうに重要なことばが使われています。*Brahmaṇyam*（ブラフマニャンム）です。ヴェーダの研究に身をささげ、ゆえに最高人格主神を知っているブラーフマナに、ドゥルヴァ・マハーラージャは強い忠誠心をいだいていました。ブラーフマナたちはいつもクリシュナ意識を広めるために忙しく働いています。国は、神の意識を全世界に広めている組織を尊ばなくてはなりませんが、あいにく現代では、そのような運動を支援する国や政府はありません。美徳に関するかぎり、国を管理する人々のなかにそのような優れた気質はほとんどありません。管理者の地位についているだけで、どのような嘆願も拒否しますが、それはまるで市民の願いを拒否するために雇われているかのように見えます。この節にあるべつのことば*dīna-vatsalam*（ディーナ・ヴァトゥサランム）もとても重要です。国の指導者は罪のない人々に親切に対応しなくてはなりません。しかし現代では、国の代表者や大統領は、国から高額の報酬を受けとり、自分を敬虔な人間のように見せかけてはいても、罪のない動物が殺されている屠殺場の管理は認めています。ドゥルヴァ・マハーラージャの神聖な気質と政治家の気質を比べようとしても、じつは比較の対象にさえならないことがわかります。次の節でわかるように、ドゥルヴァ・マハーラージャはサテャ・ユガに生きていました。サテャ・ユガの理想的な王だったのです。現代（カリ・ユガ）の政府にはどのような神聖な気質も見いだすことができません。このような状況から、現代人が宗教、生活、繁栄を確保するには、クリシュナ意識に身をゆだねる以外に選択の余地はないと言えます。

第１３節

षट्त्रिंशद्वर्षसाहस्रं शशास क्षितिमण्डलम् ।
भोगैः पुण्यक्षयं कुर्वन्नभोगैरशुभक्षयम् ॥ १३ ॥

サトゥ・トゥリンムシャドゥ・ヴァルシャ・サーハスランム
ṣaṭ-triṁśad-varṣa-sāhasraṁ

シャシャーサ　クシティ・マンダランム
śaśāsa kṣiti-maṇḍalam

ボホーガイヒ　プニャ・クシャヤンム　クルヴァンー
bhogaiḥ puṇya-kṣayaṁ kurvann

アボホーガイル　アシュバハ・クシャヤンム
abhogair aśubha-kṣayam

ṣaṭ-triṁśat—36; *varṣa*—年; *sāhasram*—1000; *śaśāsa*—治めた; *kṣiti-maṇḍalam*—地球; *bhogaiḥ*—楽しみによる; *puṇya*—敬虔なおこないの反動の; *kṣayam*—減少; *kurvan*—している; *abhogaiḥ*—苦行によって; *aśubha*—不吉な反動の; *kṣayam*—減少。

ドゥルヴァ・マハーラージャはこの惑星を36000年間治めた。そして、楽しむことで敬虔なおこないの反動を減少させ、苦行をすることで不吉な反動をも減少させた。

要旨解説

地球を36,000年間治めたということは、ドゥルヴァ・マハーラージャがサテャ・ユガに生きていたことを物語っています。人々が10万年間生きていた時代だからです。次の時代トゥレーター・ユガでは１万年間、次のドゥヴァーパラ・ユガでは1,000年間という寿命が定められていました。現代のカリ・ユガでは、最長で100年の寿命が与えられています。ユガの変遷とともに、寿命、記憶力、優しさ、さらに他の優れた気質すべてが減少していきます。おこないには、敬虔・不敬虔の２種類があります。敬虔なおこないをすることで高い物質的楽しみが味わえるようになりますが、不敬虔なおこないをすれば過酷な苦しみを体験しなくてはなりません。しかし献愛者は、楽しむことにも苦しめられることにも関心がありません。成功しているときには「今、過去の敬虔なおこないの結果を減らしている」と考えますし、苦しんでいるときには「今、過去の不敬虔なおこないの結果を減らしている」と考えます。献愛者は楽しみにも苦しみにも関心がありません。ただ主に奉仕をしたいと考えています。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、献愛奉仕をアプラティハター（*apratihatā*）、すなわち「幸福や苦悩という物質的条件にさまたげられることはない」と述べています。献愛者はエーカーダシー（Ekādaśī）や他の絶食の日に従ったり、不義の性生活、陶酔、賭博、肉食を放棄したりします。こうして過去の不敬虔なおこないの反動を清め、そして献愛奉仕というもっとも敬虔なおこないをしているため、楽しむために努力をしなくても人生を満喫することができます。

第１４節

एवं बहुसवं कालं महात्माविचलेन्द्रियः ।
त्रिवर्गौपयिकं नीत्वा पुत्रायादान्नृपासनम् ॥ १४ ॥

エーヴァンム　バフ・サヴァンム　カーランム
evaṁ bahu-savaṁ kālaṁ

マハートゥマーヴィチャレーンドゥリヤハ
mahātmāvicalendriyaḥ

トゥリ・ヴァルガウパイカンム　ニートゥヴァー
tri-vargaupayikaṁ nītvā

プトゥラーヤーダーン　ヌリパーサナンム
putrāyādān nṛpāsanam

evam—このように; *bahu*—多くの; *savam*—歳月; *kālam*—時; *mahā-ātmā*—偉大な魂; *avicala-indriyaḥ*—感覚満足に乱されることなく; *tri-varga*—３種類の世俗的活動; *aupayikam*—実行するのに有利な; *nītvā*—過ごして; *putrāya*—我が子に; *adāt*—譲った; *nṛpa-āsanam*—王座。

自己を抑制する偉大な魂ドゥルヴァ・マハーラージャは、宗教、経済発展、すべての物質的望みの満足という３種類の世俗的活動を健全にまっとうした。そのあと、王座を息子にゆずった。

要旨解説

物質生活の完成は、宗教原則を守ることで健全にまっとうすることができます。その結果として経済は順調に発展し、すべての感覚を問題なく満たすことできます。ドゥルヴァ・マハーラージャは王として自分の体制を維持する必要があり、それができなければ一般大衆を治めることは不可能でしたが、それを完璧にやりとげました。しかし我が子が成長し、王座を任せられることを確信したとき、すぐに王座を明けわたし、世俗の活動から身を引きました。

この節で使われている１つの単語*avicalendriyaḥ*（アヴィチャレーンドゥリヤハ）はとても重要で、「感覚の刺激に乱されもしなかったし、相当な年配者であったにもかかわらず感覚の力はまったく衰えていなかった」という意味があります。36,000年ものあいだ国を統治したのですから、ドゥルヴァ王はたいそう年を取っていたと考えられますが、じつはきわめて旺盛な感覚を持ちつづけていました。しかしそれでも、感覚満足にはまったく関心がありませんでした。言いかえると、自己を抑制した境地にいたということです。また、物質主義にのっとって自らの義務を完璧にまっとうしました。それが偉大な献愛者の生き方です。主チャイタンニャの愛弟子のひとりであるシュリーラ・ラグナータ・ダーサ・ゴースヴァーミーは、大富豪の子息として生まれました。物質的な幸福にはなんの関心もありませんでしたが、まかされた行政を完璧におこなっています。シュリーラ・ゴウラスンダラはラグナータ・ダーサに、「心のうちでは自分と物質界を完全に切りはなし、表向きには、世俗の仕事を義務として履行するように」と助言しました。『バガヴァッド・ギーター』が述べているように、この超越的な境地は献愛者だけが達成できます。ヨーギーのような他の人々は必死に感覚を制御しようとしますが、献愛者はより高い超越的な活動をしているため、旺盛な感覚をそなえていても、それを満たそうとはしません。

第１５節

मन्यमान इदं विश्वं मायारचितमात्मनि ।
अविद्यारचितस्वप्नगन्धर्वनगरोपमम् ॥ १५ ॥

マニャマーナ　イダンム　ヴィシュヴァンム
manyamāna idaṁ viśvaṁ

マーヤー・ラチタンム　アートゥマニ
māyā-racitam ātmani

アヴィデャー・ラチタ・スヴァプナ・
avidyā-racita-svapna-

ガンダハルヴァ・ナガローパマンム
gandharva-nagaropamam

manyamānaḥ—悟っている; *idam*—この; *viśvam*—宇宙; *māyā*—外的勢力によって; *racitam*—製造された; *ātmani*—生命体に; *avidyā*—幻想によって; *racita*—製造された; *svapna*—夢; *gandharva-nagara*—幻影; *upamam*—～のような。

シュリーラ・ドゥルヴァ・マハーラージャは、この宇宙現象界が夢や蜃気楼のように生命体を惑わせていることを悟った。この世界は至高主の幻想かつ外的力による創造物だからである。

要旨解説

深い森のなかにはいると、あたかも巨大な宮殿やすばらしい都市がそこに出現したかのように見えることがあります。その現象を*gandharva-nagara*（ガンダハルヴァ・ナガラ）といいます。同じように夢のなかで、じっさいにはない物事を想像して作りあげることがあります。自己を悟った人物、あるいは献愛者は、物質宇宙現象界が一時的で幻影であるにもかかわらず真実のように見えている、ということをよく知っています。蜃気楼のようなものです。しかし、その影の背後には真実の創造界、すなわち精神界があります。献愛者はその精神界に関心を向けているのであり、影に興味はありません。献愛者は至高の真理を悟っているからこそ、真実が一時的にあらわれている幻影には興味がないのです。これは『バガヴァッド・ギーター』（第９章・第59節）でも*paraṁ dṛṣṭvā nivartate*（パランム　ドゥリシュトゥヴァー　ニヴァルタテー）と確証されていることです。

第１６節

आत्मस्त्र्यपत्यसुहृदो बलमृद्धकोश-
मन्तःपुरं परिविहारभुवश्च रम्याः ।
भूमण्डलं जलधिमेखलमाकलय्य
कालोपसृष्टमिति स प्रययौ विशालाम् ॥ १६ ॥

アートゥマ・ストゥリ・アパテャ・スフリドー　バランム　リッダハ・コーシャンム
ātma-strī-apatya-suhṛdo balam ṛddha-kośam

アンタハ・プランム　パリヴィハーラ・ブヴァシュ　チャ　ラミャーハ
antaḥ-puraṁ parivihāra-bhuvaś ca ramyāḥ

ブー・マンダランム　ジャラディヒ・メーカハランム　アーカライヤ
bhū-maṇḍalaṁ jaladhi-mekhalam ākalayya

カーローパスリシュタンム　イティ　サ　プラヤヤウ　ヴィシャーラーンム
kālopasṛṣṭam iti sa prayayau viśālām

ātma—肉体; *strī*—妻; *apatya*—子ども; *suhṛdaḥ*—友人; *balam*—勢力、軍隊; *ṛddha-kośam*—豊かな財宝; *antaḥ-puram*—女性用居住区; *parivihāra-bhuvaḥ*—公園; *ca*—そして; *ramyāḥ*—美しい; *bhū-maṇḍalam*—地球全体; *jala-dhi*—海によって; *mekhalam*—境界; *ākalayya*—考えている; *kāla*—時によって; *upasṛṣṭam*—創造された; *iti*—このように; *saḥ*—彼は; *prayayau*—行った; *viśālām*—バダリカーシュラマに。

こうしてドゥルヴァ・マハーラージャは終焉のまえに、地球全体に広がり、広大な海に囲まれた王国を去っていった。自分の体、后たち、子どもたち、軍隊、豊富な財産、快適このうえない宮殿、数多くの美しい公園などすべてを、幻想の力が作りだしたものと考えていたのである。そしてやがてヒマラヤ山脈のバダリカーシュラマ（Badarikāśrama）という地にある森にはいっていった。

要旨解説

ドゥルヴァ・マハーラージャは幼いころ、最高人格主神をもとめて森にはいったとき、快楽は幻想エネルギーの産物であることを悟りました。もちろんそのときは、父親の王国を手にいれたいと考えていましたし、そのために至高主を探しにいっています。しかし最後にはすべてが幻想エネルギーの産物であることを悟りました。シュリーラ・ドゥルヴァ・マハーラージャの行動から私たちが学べるのは、どうにかしてクリシュナ意識になることができれば——最初はどのような動機だったとしても——やがて主の恩寵によって真実を悟ることができる、ということです。最初は父親の王国に関心を寄せていましたが、最後には偉大な

献愛者マハー・バーガヴァタになり、物質的快楽には見むきもしなくなりました。人生の完成は献愛者だけが達成できるものです。献愛奉仕をほんのわずか完成させたあと、その未熟な位置から逸脱したとしても、物質界で果報的活動をまっとうした人よりもすぐれている、と言えます。

第１７節

तस्यां विशुद्धकरणः शिववार्विगाह्य
बद्ध्वासनं जितमरुन्मनसाहृताक्षः ।
स्थूले दधार भगवत्प्रतिरूप एतद्
ध्यायंस्तदव्यवहितो व्यसृजत्समाधौ ॥ १७ ॥

タッシャーンム　ヴィシュッダハ・カラナハ　シヴァ・ヴァール　ヴィガーヒャ
tasyāṁ viśuddha-karaṇaḥ śiva-vār vigāhya

バッドゥヴァーサナンム　ジタ・マルン　マナサーフリタークシャハ
baddhvāsanaṁ jita-marun manasāhṛtākṣaḥ

ストゥヴーレー　ダダハーラ　バハガヴァトゥ・プラティルーパ　エータドゥ
sthūle dadhāra bhagavat-pratirūpa etad

デャハーヤンムス　タドゥ　アヴャヴァヒトー　ヴャスリジャトゥ　サマーダハウ
dhyāyaṁs tad avyavahito vyasṛjat samādhau

tasyām—バダリカーシュラマで; *viśuddha*—清められて; *karaṇaḥ*—彼の感覚; *śiva*—純粋な; *vāḥ*—水; *vigāhya*—～で沐浴している; *baddhvā*—固定させて; *āsanam*—座位; *jita*—支配した; *marut*—呼吸法; *manasā*—心で; *āhṛta*—引きこめた; *akṣaḥ*—彼の感覚; *sthūle*—身体の; *dadhāra*—彼は集中した; *bhagavat-pratirūpe*—主とまったく同じ姿に; *etat*—心; *dhyāyan*—～を瞑想している; *tat*—その; *avyavahitaḥ*—止むことなく; *vyasṛjat*—彼は入った; *samādhau*—法悦境に。

バダリカーシュラマで、ドゥルヴァ・マハーラージャの感覚は完全に純粋になった。澄みきった清らかな水で毎日沐浴したからである。座位を定め、ヨーガの修練をとおして呼吸と気を制御した。こうしてその感覚は完全に心の内に引きこめられた。次に心を、主の正確な複写であるアルチャー・ヴィグラハ（arcā-vigraha）の姿に集中させ、このように主を瞑想することで完全な法悦境に入っていった。

要旨解説

ここでは、ドゥルヴァ・マハーラージャがすでに修練していたアシュターンガ・ヨーガ（*aṣṭāṅga-yoga*）の方法について述べられています。アシュターンガ・ヨーガは当世風の

都市ではぜったいに実行できない方法です。ドゥルヴァ・マハーラージャはバダリカーシュラマへ行き、僻地で、ただひとり、ヨーガを修練しました。至高主そのものを表わし、崇拝を受ける神像・アルチャー・ヴィグラハに心を集中させ、こうして神像を一心に瞑想しながら、法悦境に没頭していきました。アルチャー・ヴィグラハの崇拝は、偶像崇拝ではありません。アルチャー・ヴィグラハは献愛者だけに認識できる主の化身です。ですから献愛者たちは、石、金属、木、宝石、絵画などといったストゥーラ（*sthūla*）（物質）で作られた姿、すなわちアルチャー・ヴィグラハとして、寺院で主を崇拝しています。その姿はどれもストゥーラ、物体で表わされた姿と呼ばれています。献愛者は崇拝に関連する規定原則に従っているため、主が物質の姿として祭られても、その主の姿は、本来の精神的姿そのものと変わりがないことを知っています。こうして献愛者は、人生の究極目標を達成するという恩恵、すなわち主をつねに思いつづける心境に入ることができます。主へのこのようなたえなる思いは、『バガヴァッド・ギーター』で述べられているように、私たちをもっとも気高いヨーギーに変貌させてくれます。

第１８節

भक्तिं हरौ भगवति प्रवहन्नजस्र-
मानन्दबाष्पकलया मुहुरऊ्यमानः ।
विक्लिद्यमानहृदयः पुलकाचिताङ्गो
नात्मानमस्मरदसाविति मुक्तलिङ्गः ॥ १८ ॥

バハクティンム　ハラウ　バハガヴァティ　プラヴァハン－　アジャスランム
bhaktiṁ harau bhagavati pravahann ajasram

アーナンダ・バーシュパ・カラヤー　ムフル　アルデャマーナハ
ānanda-bāṣpa-kalayā muhur ardyamānaḥ

ヴィクリデャマーナ・フリダヤハ　プラカーチターンゴー
viklidyamāna-hṛdayaḥ pulakācitāṅgo

ナートゥマーナンム　アスマラドゥ　アサーヴ　イティ　ムクタ・リンガハ
nātmānam asmarad asāv iti mukta-liṅgaḥ

bhaktim—献愛奉仕; *harau*—ハリに; *bhagavati*—最高人格主神; *pravahan*—常に従事して; *ajasram*—いつも; *ānanda*—至福に満ちた; *bāṣpa-kalayā*—あふれる涙によって; *muhuḥ*—幾度となく; *ardyamānaḥ*—克服して; *viklidyamāna*—溶けている; *hṛdayaḥ*—彼の心; *pulaka*—逆立つ髪; *ācita*—覆われて; *aṅgaḥ*—彼の体; *na*—ではない; *ātmānam*—体; *asmarat*—彼は思い出した; *asau*—彼は; *iti*—そのように; *mukta-liṅgaḥ*—希薄な体から解放されて。

崇高な至福に満たされ、目からたえまなく涙があふれ、心は恍惚状態にはいり、全身が震え、髪の毛が逆立っていた。このように変貌したドゥルヴァ・マハーラージャは、愛情奉仕の法悦境のなかで体の存在さえ忘れ、物質的束縛からまたたくまに解放された。

要旨解説

聞くこと、唱えること、思いだすこと、神像を崇拝することなど、９つの方法が定められているように、いつも主への奉仕に励む人物の体にはさまざまな兆しが表われます。献愛者がすでに内なる解脱を達成していることをしめすこの８種類の変化は、*aṣṭa-sāttvika-vikāra*（アシュタ・サーットゥヴィカ・ヴィカーラ）と呼ばれています（『チャタンニャ・チャリタームリタ』アンテャ・第14章・第99節）。献愛者が肉体の存在を完全に忘れるということは、物質界から解放されている事実を物語っています。もはや体に縛られていない、ということです。その例として挙げられるのがココナッツの実です。実が完全に乾燥すると、実内部の殻の内側にある果肉と殻が、そして殻と実の外側の繊維が分離します。乾燥したココナッツを揺らすと、殻内部の果肉が外側の殻とはすでに離れていることがわかります。同じように、主への奉仕に没頭しきっている人物は、希薄な体と濃密な体という２つの物質的覆いから完全に切りはなされます。ドゥルヴァ・マハーラージャは、愛情奉仕をつづけることでその境地にじっさいに到達したのです。マハー・バーガヴァタ（*mahā-bhāgavata*）と呼ばれていた人物ですが、それは、一流の純粋な献愛者・マハー・バーガヴァタにならなければ、このような兆候は表わされないからです。主チャイタンニャはこの兆候をすべて見せていました。タークラ・ハリダースも、そして他の多くの純粋な献愛者たちがそのような体の兆しを見せました。真似するべきことではありませんが、ほんとうに高められた人物にはこのような兆しが表われるものです。その献愛者こそが、物質の束縛から自由になったとされます。もちろん、主に奉仕をはじめれば、ココナッツの実が木から落ちたときから乾燥しはじめるように、解脱の道は開かれます。ただ、殻と果肉が分離するのに時間がかかる、というだけのことです。

この節で重要なことばは*mukta-liṅgaḥ*（ムクタ・リンガハ）です。*Mukta*（ムクタ）は「解放されて」、（リンガ）は「希薄な体」をさします。人は死んで肉体を捨てますが、心と知性と自我でできた希薄な体は、その人を新しい肉体に運んでいきます。現在の体として存在しているあいだ、その希薄な体が、心の発達とともに、魂をある時期から次の時期へと運びます（たとえば幼少期から少年期へ）。赤ん坊の心は少年の心とは状態が異なり、また少年の心と青年の心の状態も違い、そして青年と老人も違った状態の心を持っています。そして死ぬとき、その希薄な体ゆえに肉体の変化が生じます。心、知性、自我が魂を濃密な体から別の体に運んでいくのです。これが魂の転生です。しかし、希薄な体から解放されたときにでさえ別の状態が発生します。そのときこそ、超越的・精神的な世界に移される準備が完全にととのっ

た、ということを表わしています。
シュリー・ドゥルヴァ・マハーラージャの肉体の変化の描写は、完全に精神界に移されるにふさわしい状態になった、ということを明らかにしています。希薄な体と濃密な体の違いは、日々の暮らしのなかで体験することができます。夢を見ているとき、その人の魂・生命体は希薄な体によって別の次元に移動されているのですが、その人の体はベッドの上に横たわっています。しかし、肉体は生きつづけなくてはならないため、希薄な体がまいもどり、そして濃密な体にふたたび収まります。ですから、希薄な体からも解放される必要がある、ということです。この自由をムクタ・リンガといいます。

第１９節

स ददर्श विमानाग्र्यं नभसोऽवतरद् ध्रुवः ।
विभ्राजयद्दश दिशो राकापतिमिवोदितम् ॥ १९ ॥

サ　ダダルシャ　ヴィマーナーグリャンム
sa dadarśa vimānāgryaṁ

ナバハソー　ヴァタラドゥ　ドゥヴルヴァハ
nabhaso 'vatarad dhruvaḥ

ヴィブヴラージャヤドゥ　ダシャ　ディショー
vibhrājayad daśa diśo

ラーカーパティンム　イヴォーディタンム
rākāpatim ivoditam

saḥ—彼は; *dadarśa*—見た; *vimāna*—飛行船; *agryam*—非常に美しい; *nabhasaḥ*—空から; *avatarat*—降りてくる; *dhruvaḥ*—ドゥルヴァ・マハーラージャ; *vibhrājayat*—光り輝いている; *daśa*—10; *diśaḥ*—方角; *rākā-patim*—満月; *iva*—のような; *uditam*—見える。

解脱の境地の兆しが表われたとき、ドゥルヴァはこのうえなく美しい飛行船が空から舞いおりてくるのを見た。あたかも、光りかがやく満月が10の方角を照らしながら降りてくるように。

要旨解説

取得できる知識にはさまざまな段階があり、それは、直接得る知識、権威者からさずかる知識、超越的知識、感覚を超えた知識、そして最後に精神的知識などに分けられます。上から伝えられる方法をとおして知識を得る段階を超えた人物は、すぐに超越的境地に高められます。ドゥルヴァ・マハーラージャは物質的概念の生活から解放された人物ですから、超越

的な知識の段階にあり、満月のように光りかがやく崇高な飛行船を見ることができました。これは、知識を直接・間接に得ようとする人には不可能なことです。このような知識は最高人格主神からの特別の恩寵です。しかしこの知識の段階には、愛情奉仕、すなわちクリシュナ意識という段階的方法で高められていきます。

第２０節

तत्रानु देवप्रवरौ चतुर्भुजौ
श्यामौ किशोरावरुणाम्बुजेक्षणौ ।
स्थितावावष्टभ्य गदां सुवाससौ
किरीटहारा्रादचारुकुण्डलौ ॥ २० ॥

タトゥラーヌ　デーヴァ・プラヴァラウ　チャトゥル・ブッジャウ
tatrānu deva-pravarau catur-bhujau

シャーマウ　キショーラーヴ　アルナーンブジェークシャナウ
śyāmau kiśorāv aruṇāmbujekṣaṇau

ステェィターヴ　アヴァシュタビェヤ　ガダーンム　スヴァーササウ
sthitāv avaṣṭabhya gadāṁ suvāsasau

キリータ・ハーラーンガダ・チャール・クンダラウ
kirīṭa-hārāṅgada-cāru-kuṇḍalau

tatra—そこに; *anu*—その時; *deva-pravarau*—二人の非常に美しい半神; *catuḥ-bhujau*—4本腕の; *śyāmau*—黒っぽい; *kiśorau*—きわめて若い; *aruṇa*—赤みがかった; *ambuja*—蓮華の花; *īkṣaṇau*—目で; *sthitau*—置かれて; *avaṣṭabhya*—手にしている; *gadām*—戦闘棒; *suvāsasau*—素晴らしい衣服で; *kirīṭa*—王冠; *hāra*—首飾り; *aṅgada*—腕輪; *cāru*—美しい; *kuṇḍalau*—耳飾りで。

ドゥルヴァ・マハーラージャは、ひじょうに美しいふたりの主ヴィシュヌの従者がその飛行船に乗っているのを見た。黒光りする体に4本の腕をもつふたりは、みずみずしい若さにあふれ、その目は赤らんだ蓮華の花を思わせる。手に戦闘棒をもち、王冠をかぶり、そしてきわめて麗しい衣服、首飾り、腕輪、耳飾りなどで飾られている。

要旨解説

ヴィシュヌローカの住人は、主ヴィシュヌとおなじ姿をしており、やはり手に戦闘棒、法螺貝、蓮華の花などをもっています。この節では、かれらが4本の腕をもち、魅力的な衣服に身をつつんでいることが描写されています。体の装飾品の説明も、ヴィシュヌのものと完

全に一致しています。つまり、飛行船に乗って降りてきたこのふたりの並はずれた人物は、主ヴィシュヌが住む惑星、すなわちヴィシュヌローカから直接降りてきたということです。

第２１節

विज्ञाय तावुत्तमगायकिङ्करा-
वभ्युत्थितः साध्वसविस्मृतक्रमः ।
ननाम नामानि गृणन्मधुद्विषः
पार्षत्प्रधानाविति संहताञ्जलिः ॥ २१ ॥

ヴィギャーヤ　ターヴ　ウッタマガーヤ・キンカラーヴ
vijñāya tāv uttamagāya-kiṅkarāv

アビュッテヒヒタハ　サードゥヴァサ・ヴィスムリタ・クラマハ
abhyutthitaḥ sādhvasa-vismṛta-kramaḥ

ナナーマ　ナマーニ　グリナン　マドゥドゥヴィシャハ
nanāma nāmāni gṛṇan madhudviṣaḥ

パールシャトゥ・プラダハーナーヴ　イティ　サンムハターンジャリヒ
pārṣat-pradhānāv iti saṁhatāñjaliḥ

vijñāya—理解したあと; *tau*—彼らに; *uttama-gāya*—（きわめて名高い）主ヴィシュヌの; *kiṅkarau*—２人の従者; *abhyutthitaḥ*—立ち上がった; *sādhvasa*—当惑して; *vismṛta*—忘れた; *kramaḥ*—適切な振る舞い; *nanāma*—敬意を表した; *nāmāni*—名前; *gṛṇan*—唱えている; *madhu-dviṣaḥ*—（マドゥの敵である）主の; *pārṣat*—従者たち; *pradhānau*—主要な; *iti*—そのように; *saṁhata*—敬意をこめて合わせた; *añjaliḥ*—合掌して。

ドゥルヴァ・マハーラージャは、この非凡なふたりの人物が最高人格主神から直接遣わされた従者であることにきづき、すぐさま立ちあがった。しかし当惑し、気が動転していたため、しかるべきことばで迎えることを忘れてしまった。そのため、ただ手を合わせて敬意を表し、主の聖なる名前を唱え、讃えた。

要旨解説

主の聖なる名前をとなえる行為はどのような場合でも完璧です。ドゥルヴァ・マハーラージャは、４本腕を持ち、美しい衣装に身をつつんだ主ヴィシュヌに直接仕えるヴィシュヌドゥータたちを見たとき、ふたりがだれであるかがすぐにわかったのですが、しばし気が動転していました。それでも、ハレー・クリシュナ・マントラという主の聖なる名前をただ唱えることで、忽然と目のまえに現われたこの並はずれた客人たちを満足させることができまし

た。主の聖なる名前の唱名は完璧です。主ヴィシュヌや主の従者を喜ばせる方法を知らなくても、主の聖なる名前を心をこめて口にしさえすれば、すべてが完璧に成就されます。ですから献愛者は、危険なときにも幸せなときにも、いつもハレー・クリシュナ・マントラを唱えます。そうすれば危険な状況にあってもすぐに救われ、主ヴィシュヌや従者のまえでも、マハー・マントラを唱えさえすれば主を喜ばせることができます。これが、マハー・マントラにそなわっている絶対的な特質です。危険なときにも幸せなときにも、どのような制約もうけることなく唱えることができるのです。

第２２節

तं कृष्णपादाभिनिविष्टचेतसं
बद्धाञ्जलिं प्रश्रयनम्रकन्धरम् ।
सुनन्दनन्दावुपसृत्य सस्मितं
प्रत्यूचतुः पुष्करनाभसम्मतौ ॥ २२ ॥

タンム　クリシュナ・パーダービヒニヴィシュタ・チェータサンム
taṁ kṛṣṇa-pādābhiniviṣṭa-cetasaṁ

バッダハーンジャリンム　プラシュラヤ・ナンムラ・カンダハランム
baddhāñjaliṁ praśraya-namra-kandharam

スナンダ・ナンダーヴ　ウパスリテャ　サスミタンム
sunanda-nandāv upasṛtya sasmitaṁ

プラテューチャトゥフ　プシュカラナーバハ・サンマタウ
pratyūcatuḥ puṣkaranābha-sammatau

tam—彼を; *kṛṣṇa*—主クリシュナの; *pāda*—蓮華の御足の; *abhiniviṣṭa*—思いに没頭して; *cetasam*—〜の心; *baddha-añjalim*—手を合わせて; *praśraya*—ひじょうに慎ましく; *namra*—お辞儀した; *kandharam*—〜の首; *sunanda*—スナンダ; *nandau*—そしてナンダ; *upasṛtya*—近づいている; *sa-smitam*—微笑んで; *pratyūcatuḥ*—呼びかけた; *puṣkara-nābha*—蓮華のような臍を持つ主ヴィシュヌの; *sammatau*—親密な召使い。

ドゥルヴァ・マハーラージャはいつも主クリシュナの蓮華の御足への思いに没頭していた。心のなかにはクリシュナのことしかなかったのである。ナンダとスナンダという至高主の親密なふたりの従者が満面に笑顔をうかべて近づいてきたとき、ドゥルヴァは合掌して立ちあがり、慎ましく頭をさげた。ふたりは次のように話しかけた。

要旨解説

この節にある*puṣkaranābha-sammatau*（プシュカラナーバハ・サンマタウ）ということばは重要です。クリシュナ、あるいは主ヴィシュヌは、蓮華の目、蓮華の御足、蓮華の手のひらを持つ方としてよく知られています。この節で主は*puṣkara-nābha*（プシュカラ・ナーバハ）と呼ばれていますが、それは「蓮華の臍を持つ最高人格主神」という意味であり、また*sammatau*（サンマタウ）ということばは「ふたりの親密な、ひじょうに従順な召使い」という意味です。物質生活と精神生活は、至高主に対して不従順か従順かという点で異なります。どの生命体も至高主の部分体であり、本来、至高の人物の命令にいつでも従う立場にあります。それが完璧な一体性です。

ヴァイクンタの世界では、主の命令にそむく生命体はひとりもいませんから、至高主神と一体化した境地にあります。しかしここ物質界に住む生命体は*sammata*（サンマタ）「同意する」ことはなく、いつも*asammata*（アサンマタ）「同意しない」者たちばかりです。人間生活は、至高主の命令に同意する指導を受ける機会です。この指導体制を社会に導入するのがクリシュナ意識運動の使命でもあります。『バガヴァッド・ギーター』で言われているように、物質自然の法則はひじょうに厳格です。だれもその厳格な法則を超えることはできません。しかし、身をゆだねた魂になったり、至高主の命令を受けいれる魂になったりすれば克服できます。ドゥルヴァ・マハーラージャの生涯がその模範例です。最高人格主神の命令に同意し、神への愛情をたかめることで、主ヴィシュヌの親密な召使いと顔を合わせることができたのですから。ドゥルヴァ・マハーラージャにできたことは、だれにもできることです。献愛奉仕に真剣に励む人なら、だれでも、やがては人間生活で得られるその完璧な境地に到達することができるのです。

第２３節

सुनन्दनन्दावूचतुः

भो भो राजन् सुभद्रं ते वाचं नोऽवहितः शृणु ।
यः पञ्चवर्षस्तपसा भवान्देवमतीतृपत् ॥ २३ ॥

スナンダ・ナンダーヴ　ウーチャトゥフ
sunanda-nandāv ūcatuḥ

ボホー　ボホー　ラージャン　スバハドゥランム　テー
bho bho rājan subhadraṁ te

ヴァーチャンム　ノー　ヴァヒタハ　シュリヌ
vācaṁ no 'vahitaḥ śṛṇu

ヤハ　パンチャ・ヴァルシャス　タパサー
yaḥ pañca-varṣas tapasā

バハヴァーン　デーヴァンム　アティートゥリパトゥ
bhavān devam atītṛpat

sunanda-nandau ūcatuḥ—スナンダとナンダが言った; *bhoḥ bhoḥ rājan*—王よ; *su-bhadram*—幸運; *te*—あなたに; *vācam*—言葉; *naḥ*—私たちの; *avahitaḥ*—注意深く; *śṛṇu*—聞く; *yaḥ*—〜である者; *pañca-varṣaḥ*—５歳; *tapasā*—苦行によって; *bhavān*—あなたは; *devam*—最高人格主神; *atītṛpat*—大いに満足した。

主ヴィシュヌの親密な従者ナンダとスナンダが言った。「王よ。あなたにあらゆる幸運がさずけられるように。これから私たちが言うことをよくきいてほしい。あなたはまだ５歳だったころ、きびしい修行をして最高人格主神を深く満足させた」

要旨解説

ドゥルヴァ・マハーラージャができたことはだれにでもできることです。５歳の子どもなら指導を受けることができますし、指導を受けた子の生涯は、そう遠くない日にクリシュナ意識の悟りによって成功するはずです。しかしあいにく、現代では世界のどこでもこのような指導がおこなわれていません。クリシュナ意識運動の指導者は、子どもたちを５歳から正しく導くためにも、世界各地で教育施設を作る必要があります。それが実現できれば、子どもたちはヒッピーになったり甘やかされた子どもになったりすることもありませんし、それどころか、主の献愛者になることができます。このようにして、世界はおのずと変化していくのです。

第２４節

तस्याखिलजगद्धातुरावां देवस्य शार्ङ्गिणः ।
पार्षदाविह सम्प्राप्तौ नेतुं त्वां भगवत्पदम् ॥ २४ ॥

タッシャーキヒラ・ジャガドゥ・ダハートゥル
tasyākhila-jagad-dhātur

アーヴァーンム　デーヴァッシャ　シャールンギナハ
āvāṁ devasya śārṅgiṇaḥ

パールシャダーヴ　イハ　サンプラープタウ
pārṣadāv iha samprāptau

ネートゥンム　トゥヴァーンム　バハガヴァトゥ・パダンム
netuṁ tvāṁ bhagavat-padam

tasya—主の; *akhila*—全体の; *jagat*—宇宙; *dhātuḥ*—創造者; *āvām*—私たち; *devasya*—最高人格主神の; *śārṅgiṇaḥ*—シャールンガという名の弓を持つ方; *pārṣadau*—交流者; *iha*—今; *samprāptau*—近づいた; *netum*—連れていくために; *tvām*—あなたを; *bhagavat-padam*—最高人格主神の場所に。

私たちは、シャールンガという名の弓を手に持つ全宇宙の創造者、最高人格主神の代表者であり、あなたを精神界に案内するために遣わされた。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』で主は、（物質界あるいは精神界での）主の超越的な娯楽を知り、主をほんとうに理解したり、主がどのように降誕し、どのように行動するかを理解したりする者はだれでも、すぐさま精神界に移されるにふさわしい人物となる、と言っています。『バガヴァッド・ギーター』に述べられているこの原則は、ドゥルヴァ王の生涯に見られます。一生を通じ、ドゥルヴァ王は苦行や改悛をとおして最高人格主神を理解しようとした人物です。そして完全に機が熟した今、主の親密な交流者によって精神界に移されるにふさわしい境地になったのでした。

第２５節

सुदुर्जयं विष्णुपदं जितं त्वया
यत्सूरयोऽप्राप्य विचक्षते परम् ।
आतिष्ठ तच्चन्द्रदिवाकरादयो
ग्रहर्क्षताराः परियन्ति दक्षिणम् ॥ २५ ॥

スドゥルジャヤンム　ヴィシュヌ・パダンム　ジタンム　トゥヴァヤー
sudurjayaṁ viṣṇu-padaṁ jitaṁ tvayā

ヤトゥ　スーラヨー　プラーピャ　ヴィチャクサテー　パランム
yat sūrayo 'prāpya vicakṣate param

アーティシュタハ　タチ　チャンドゥラ・ディヴァーカラーダヨー
ātiṣṭha tac candra-divākarādayo

グラハルクシャ・ターラーハ　パリヤンティ　ダクシナンム
graharkṣa-tārāḥ pariyanti dakṣiṇam

sudurjayam—非常に達成しにくい; *viṣṇu-padam*—ヴァイクンタローカあるいはヴィシュヌローカと知られる惑星; *jitam*—征服した; *tvayā*—あなたによって; *yat*—〜であるもの; *sūrayaḥ*—偉大な半神たち; *aprāpya*—達成することなく; *vicakṣate*—見るだけ; *param*—至

高の; *ātiṣṭha*—来てください; *tat*—その; *candra*—月; *diva-ākara*—太陽; *ādayaḥ*—そしてその他の; *graha*—９つの惑星（水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、冥王星）; *ṛkṣa-tārāḥ*—星; *pariyanti*—軌道を回る; *dakṣiṇam*—右側に。

ヴィシュヌローカに到達することはきわめて困難であるが、あなたは苦行によってそれを克服された。偉大なリシや半神たちでさえ、この境地に入ることができない。この至高の住居［ ヴィシュヌ惑星 ］を見るためだけに、太陽、月、他の惑星、星々、宿曜（すくよう）[*1]、太陽系はその周囲を回っている。さあ、出立しよう。あなたはその世界に呼ばれているのだ。

要旨解説

物質界にいる科学者、哲学者、思索家といわれる人々でさえ精神界に入ろうと努力していますが、ぜったいにそこへは行けません。しかし献愛者は、主への愛情奉仕をとおして精神界がどういうところであるかを知るだけでなく、じっさいにそこへ行き、至福と知識にあふれた永遠な生活を満喫することができます。クリシュナ意識運動には大いなる力がこめられており、この生き方を採りいれ、神への愛情を高めることで、かんたんに、ふるさとへ、神のもとへ帰ることができます。この節では、ドゥルヴァ・マハーラージャの実例がしめされています。科学者や哲学者が月に行っても、いつまでもそこにいることも住むこともできずにいるいっぽうで、献愛者はたやすく他の惑星に行くことができ、そして最後に神のもとに行きつきます。献愛者はほかの惑星を見たいとは思っていませんが、神の惑星にむかっているときに、全惑星の様子を見ながら通りすぎることができます。遠く離れた場所に行くとき、小さな駅をいくつも通過していくように。

＊1 黄道帯（こうどうたい）を27または28に分割した領域：訳者注

第２６節

अनास्थितं ते पितृभिरन्यैरप्य्र। कर्हिचित् ।
आतिष्ठ जगतां वन्ँ तद्विष्णोः परमं पदम् ॥ २६ ॥

アナーステヒイタンム　テー　ピトゥリビヒル
anāsthitaṁ te pitṛbhir

アニャイル　アピ　アンガ　カルヒチトゥ
anyair apy aṅga karhicit

アーティシュタハ　ジャガターンム　ヴァンデャンム
ātiṣṭha jagatāṁ vandyaṁ

タドゥ　ヴィシュノーホ　パラマンム　パダンム
tad viṣṇoḥ paramaṁ padam

anāsthitam—決して到達していない; *te*—あなたの; *pitṛbhiḥ*—先祖によって; *anyaiḥ*—他の人々によって; *api*—でさえ; *aṅga*—ドゥルヴァよ; *karhicit*—いつでも; *ātiṣṭha*—ぜひ来てください、そしてそこに住んでください; *jagatām*—宇宙の住人によって; *vandyam*—崇拝できる; *tat*—その; *viṣṇoḥ*—主ヴィシュヌの; *paramam*—至高の; *padam*—状態。

ドゥルヴァ王よ。あなたの祖先も、他のだれも、そのような超越的惑星に到達した者はいない。その惑星をヴィシュヌローカといい、主ヴィシュヌみずからそこに住み、他の惑星すべてを超えた位置にある。そして、あらゆる惑星の住人に崇められている。私たちといっしょに来て、そこでとわに住むのだ。

要旨解説

ドゥルヴァ・マハーラージャが苦行をしに森に入ったとき、先祖のだれも思いえがいたことのない地位を手にいれる決意をしていました。父はウッターナパーダ、祖父はマヌ、曾祖父は主ブラフマーでした。つまり、ドゥルヴァは主ブラフマーが得られる以上の王国を望んでいたということであり、それが実現できる方法をナーラダ・ムニにもとめたことになります。主ヴィシュヌの従者たちが告げたのは、祖先たちだけではなく、ドゥルヴァ以前にはだれも主ヴィシュヌが住む惑星・ヴィシュヌローカに行くことができなかった、ということでした。これは、物質界にいるだれもが、カルミー（*karmī*）、ギャーニー（*jñānī*）、ヨーギー（*yogī*）であり、純粋な献愛者はほとんどいない、ということによるものです。ヴィシュヌローカという崇高な惑星はとくに献愛者のためにあり、カルミー、ギャーニー、ヨーギーたちが住める場所ではありません。偉大なリシも半神もブラフマローカに近づくことさえできない、と『バガヴァッド・ギーター』で言われています。ブラフマローカは永遠な住居ではありません。主ブラフマーの寿命は、その１日でさえ計算できないほど長いのですが、それでも主ブラフマーもその住居とともに終焉を迎えます。『バガヴァッド・ギーター』（第８章・第16節）では*ābrahma-bhuvanāl lokāḥ punar āvartino 'rjuna*（アーブラフマ・ブッヴァナール　ローカーハ　プナル　アーヴァルティノー　ルジュナ）「ヴィシュヌローカに行く者たちをのぞき、だれもが生老病死という物質生活の４つの原則に縛られている」と言われています。主はまた、*yad gatvā na nivartante tad dhāma paramaṁ mama*（ヤドゥ　ガトゥヴァー　ナ　ニヴァルタンテー　タドゥ　ダハーマ　パラマンム　ママ）「ひとたび辿りつけば、もどってこない惑星、それがわたしの至高の住居である」と言っています（『バガヴァッド・ギーター』第15章・第６節）。ドゥルヴァ・マハーラージャは告げられました、「あなたは私たちとともに、ひとたび行けば物質界にはもどってこないその惑星に行くのである」と。物質的な科学者は、月や他の星に行こうとしていますが、ブラフマローカという頂点の惑星に行くことは思いもつきません。かれらには想像すらできないからです。物質界での計算では、光の速度でその頂点の惑星に

着くには４万光年かかります。機械を使った方法ではこの宇宙の頂点の惑星に行けませんが、ドゥルヴァ・マハーラージャが実践したバクティ・ヨーガという方法に従えば、この宇宙の別の惑星にも行けますし、宇宙を超えたヴィシュヌローカ惑星にでさえ行くことができます。この方法の概略を、私は『惑星への自由旅行』（*Easy Journey to Other Planets*）という小冊子に紹介しています。

第２７節

एतद्विमानप्रवरमुत्तमश्लोकमौलिना ।
उपस्थापितमायुष्मन्नधिरोढुं त्वमर्हसि ॥ २७ ॥

エータドゥ　ヴィマーナ・プラヴァランム
etad vimāna-pravaram

ウッタマシュローカ・マウリナー
uttamaśloka-maulinā

ウパスタハーピタンム　アーユシュマンー
upasthāpitam āyuṣmann

アデヒィロードフゥンム　トゥヴァンム　アルハシ
adhiroḍhuṁ tvam arhasi

etat—この; *vimāna*—飛行船; *pravaram*—独特な; *uttamaśloka*—最高人格主神; *maulinā*—全生命体の筆頭者によって; *upasthāpitam*—送られた; *āyuṣman*—不滅の者よ; *adhiroḍhum*—乗ること; *tvam*—あなたは; *arhasi*—ふさわしい。

不滅なる者よ。このたぐいまれな飛行船は、全生命体の筆頭者であり、よりぬかれた祈りのことばによって崇拝される最高人格主神によって送られた。あなたはこの飛行船に乗るにふさわしい資格をそなえている。

要旨解説

天文学上の計算では、北極星のほかにシシュマーラ（Śiśumāra）という別の星があり、そこには物質界を維持する主ヴィシュヌが住んでいます。シシュマーラやドゥルヴァローカは、ヴァイシュナヴァ以外のだれにも行くことができず、そのことが次のシュローカで述べられます。主ヴィシュヌの従者たちはドゥルヴァ・マハーラージャのために特別の飛行船をとどけ、そしてそれが主ヴィシュヌによって特別に送られたものであることを知らせました。ヴァイクンタの飛行船は、機械装置で動くのではありません。宇宙空間を飛行する３つの方法があります。その１つは現代科学者に知られています。サンスクリット語で*ka-pota-vāyu*

（カ・ポータ・ヴァーユ）といいます。*Ka*（カ）は「宇宙空間」、*pota*（ポータ）は「船」を指します。２番目の方法は*kapota-vāyu*（カポータ・ヴァーユ）で、*kapota*（カポータ）は「鳩」という意味です。鳩を訓練すれば、鳩は人を宇宙空間に連れていくことができます。３番目の方法はひじょうに繊細な科学で、*ākāśa-patana*（アーカーシャ・パタナ）といいます。このアーカーシャ・パタナの方法もやはり物質的です。心が機械装置を使わずに好きな場所に飛んでいけるように、アーカーシャ・パタナの飛行船は心の速度で飛ぶことができます。このアーカーシャ・パタナの方法を超えるのがヴァイクンタの方法で、それは完全に精神的です。ドゥルヴァ・マハーラージャをシシュマーラに移すために主ヴィシュヌによって送られたこの飛行船は完璧に精神的で、超越的な飛行船です。物質的科学者にはこのような飛行船を見ることができませんし、それがどのように空間を飛ぶかも想像すらできません。精神界については『バガヴァッド・ギーター』（第８章・第20節）で*paras tasmāt tu bhāvo 'nyaḥ*（パラス　タスマートゥ　トゥ　バハーヴォー　ニャハ）と述べられているのですが、物質的科学者はこの世界についてはなにも知りません。

第２８節

मैत्रेय उवाच

निशम्य वैकुण्ठनियोज्यमुख्ययो-
र्मधुच्युतं वाचमुरुक्रमप्रियः ।
कृताभिषेकः कृतनित्यमङ्गलो
मुनीन् प्रणम्याशिषमभ्यवादयत् ॥ २८ ॥

マイトゥレーヤ　ウヴァーチャ
maitreya uvāca

ニシャミャ　ヴァイクンタハ・ニヨージャ・ムキヒャヨール
niśamya vaikuṇṭha-niyojya-mukhyayor

マドフゥ・チュタンム　ヴァーチャンム　ウルクラマ・プリヤハ
madhu-cyutaṁ vācam urukrama-priyaḥ

クリタービヒシェーカハ　クリタ・ニテャ・マンガロー
kṛtābhiṣekaḥ kṛta-nitya-maṅgalo

ムニーン　プラナミャーシシャンム　アビヒャヴァーダヤトゥ
munīn praṇamyāśiṣam abhyavādayat

maitreyaḥ uvāca—偉大な聖者マイトゥレーヤが言った; *niśamya*—聞いたあと; *vaikuṇṭha*—主の; *niyojya*—交流者; *mukhyayoḥ*—筆頭者の; *madhu-cyutam*—蜂蜜を注ぐように; *vācam*—話し方; *urukrama-priyaḥ*—主にとって非常に愛しいドゥルヴァ・マハー

ラージャ; *kṛta-abhiṣekaḥ*—神聖な沐浴をした; *kṛta*—行なった; *nitya-maṅgalaḥ*—日々の精神的義務; *munīn*—聖者たちに; *praṇamya*—お辞儀をして; *āśiṣam*—祝福; *abhyavādayat*—受けいれた。

偉大な聖者マイトゥレーヤがことばをつづけた。「マハーラージャ・ドゥルヴァは、最高人格主神にとってこのうえなく愛しい人物だった。ヴァイクンタ惑星での主の筆頭の従者から心こもることばをかけられたドゥルヴァは、すぐに神聖な沐浴をし、適切な装飾品で身を飾り、日々の精神的義務をおこなった。そのあと、居あわせた偉大な聖者たちに心をこめて敬意を表し、かれらの祝福を受けた」

要旨解説

ここで注目すべき点は、ドゥルヴァ・マハーラージャが、物質界を去るときにでさえ自分の奉仕を忠実に遂行したことにあります。奉仕の義務を細心の注意とともにたえず実行していたのです。献愛者はかならず早朝の沐浴をし、ティラカ（*tilaka*）で体を飾らなくてはなりません。カリ・ユガでは、金や宝石の装飾品はなかなか手に入りませんが、体の12箇所をティラカで飾ることは、体を清める吉兆な装飾品として十分です。ドゥルヴァ・マハーラージャはこのときバダリカーシュラマに住んでいたため、ほかにも偉大な聖者たちがいましたが、主ヴィシュヌから送られた飛行船が自分を待っていることに慢心したわけではありません。ヴァイクンタの従者の筆頭者が持ってきた飛行船に乗るまえ、慎ましいヴァイシュナヴァとして、聖者たちすべてから祝福を受けたのでした。

第２９節

परीत्याभ्यर्च्य धिष्ण्याग्र्यं पार्षदावभिवन्द्य च ।
इयेष तदधिष्ठातुं बिभ्रद्रूपं हिरण्मयम् ॥ २९ ॥

パリーテャービヒャルチャ　デヒィシュニャーグリャンム
parītyābhyarcya dhiṣṇyāgryaṁ

パールシャダーヴ　アビヒヴァンデャ　チャ
pārṣadāv abhivandya ca

イイェーシャ　タドゥ　アデヒィシュタハートゥンム
iyeṣa tad adhiṣṭhātuṁ

ビブァラドゥ　ルーパンム　ヒランマヤンム
bibhrad rūpaṁ hiraṇmayam

parītya—周囲を回って; *abhyarcya*—崇拝して; *dhiṣṇya-agryam*—その超越的な飛行船; *pārṣadau*—二人の従者に; *abhivandya*—敬意を表して; *ca*—もまた; *iyeṣa*—彼は試みた; *tat*—その飛行船; *adhiṣṭhātum*—乗ること; *bibhrat*—輝いている; *rūpam*—彼の姿; *hiraṇmayam*—黄金の。

ドゥルヴァ・マハーラージャは、乗船するまえにその飛行船のまわりをまわって崇拝し、ヴィシュヌの従者たちに敬意を表した。そのときには、ドゥルヴァの体は溶けた金のように鮮やかに光り輝いていた。こうして、その超越的な飛行船に乗る準備がすべてととのった。

要旨解説

絶対的世界では、飛行船も主ヴィシュヌの従者も、そして主ヴィシュヌ自身もすべて完全に精神的です。物質的な穢れはいっさいありません。質的に、そこではすべてがひとつです。主ヴィシュヌが崇拝を受ける方であるように、主の従者、主の周辺の事物、飛行船、住居などすべてが崇拝に値する対象です。それは、ヴィシュヌに関するすべてが主ヴィシュヌとまったく同じだからです。ドゥルヴァ・マハーラージャは純粋なヴァイシュナヴァであり、そのことを熟知していたため、飛行船に乗るまえにその従者たちや飛行船に敬意を表したのでした。しかしそのときには、ドゥルヴァの体は精神的存在に変貌し、そのために体は溶けた金のように輝いていました。こうして、ヴィシュヌローカに属する一員になったのです。マーヤーヴァーディー哲学者は、この一体性がさまざまな多様性のなかでさえ達成できることが納得できません。かれらの考える一体性に多様性は含まれていません。だからこそ非人格論者になるのです。シシュマーラ（ヴィシュヌローカあるいはドゥルヴァローカ）が物質界とは隔絶した存在であるように、物質界にあるヴィシュヌ寺院も、やはり物質界とはまったく別次元の存在にあります。その寺院のなかにいれば、私たちは物質界とは別次元の世界にいることになります。寺院のなかでは、主ヴィシュヌ、主の王座、主の部屋、その他すべてが超越的です。サットゥヴァ・グナ（*sattva-guṇa*）、ラジョー・グナ（*rajo-guṇa*）、タモー・グナ（*tamo-guṇa*）がヴィシュヌ寺院に入りこむ余地はありません。ですから、森に住むことは徳性、都市に住むことは激性、売春窟や酒屋や屠殺場に住むことは無知の様式にいる、とされています。しかし、寺院に住むのはヴァイクンタローカに住んでいるのと同じです。寺院のなかにあるものすべては、主ヴィシュヌあるいはクリシュナと同じように崇拝に値する存在なのです。

第３０節

तदोत्तानपदः पुत्रो ददर्शान्तकमागतम् ।
मृत्योर्मूर्ध्नि पदं दत्त्वा आरुरोहाद्भुतं गृहम् ॥ ३० ॥

タドーッターナパダハ　プトゥロー
tadottānapadaḥ putro

ダダルシャーンタカンム　アーガタンム
dadarśāntakam āgatam

ムリテョール　ムールドフウニ　パダンム　ダットゥヴァー
mṛtyor mūrdhni padaṁ dattvā

アールローハドゥブッタンム　グリハンム
ārurohādbhutaṁ gṛham

tadā—その時; *uttānapadaḥ*—ウッターナパーダ王の; *putraḥ*—子息; *dadarśa*—見ることができた; *antakam*—死の権化; *āgatam*—彼に近づいた; *mṛtyoḥ mūrdhni*—死の頭の上に; *padam*—足; *dattvā*—置いている; *āruroha*—乗った; *adbhutam*—素晴らしい; *gṛham*—巨大な家のような飛行船に。

その神々しい飛行船に乗ろうとしたとき、ドゥルヴァ・マハーラージャは死の権化が近づいてくるのを見た。しかし、ためらうことなく死の権化の頭に足を乗せ、そして一軒の家屋を思わせるほどの巨大な飛行船に乗った。

要旨解説

献愛者の他界と非献愛者の他界をおなじものと考えるのは、まったくの誤解です。ドゥルヴァ・マハーラージャは、超越的な飛行船に乗ろうとしていたとき、不意に目のまえに現われた死の権化を見ましたが、恐れをなすことはありませんでした。ドゥルヴァは、死に混乱させられることなく、死がそこにいる機会をとらえて、自分の足をその頭の上に乗せました。知識に欠ける人々は、献愛者の死と非献愛者の死の違いがわかりません。この違いを理解できる例があります。猫は自分の子どもを口にくわえたり、ネズミをくわえたりします。見たところ、くわえるのはネズミも子猫も同じですが、じつはまったく違います。猫がネズミを口にくわえるとき、ネズミにとってそれは死を意味するのですが、子猫はくわえられていることを楽しんでいます。飛行船に乗ろうとしたドゥルヴァ・マハーラージャは、敬意を表しにきた死の権化の到着に際して、ここで巨大な家（グリハンム・*gṛham*）と描写されているその華麗な飛行船に乗りこみました。

『シュリーマド・バーガヴァタム』のなかには同じような飛行船についてほかにも数多く述べられています。カルダマ・ムニが妻デーヴァフーティといっしょに全宇宙を旅するために飛行船を創ったとき、それは多くの家、湖、庭などをそなえた巨大な都市のように見えました。現代科学者は巨大な飛行機を作りましたが、乗客たちは機内に詰めこまれ、飛行中にもあらゆる不愉快な思いを強いられています。

物質科学者は、完璧な飛行機を作ることさえできません。カルダマが使った飛行船、ある

いはヴィシュヌローカから飛んできた飛行船に対抗するには、湖、庭、公園などをそなえた快適で巨大な都市のような飛行機を作ってみせなくてはなりません。大気圏外を飛びまわり、どの惑星にも飛んでいけるような飛行機を。そのような飛行機が発明できれば、燃料補給用の宇宙センターを作らなくてもすむでしょう。無尽蔵の燃料を積んでいるか、あるいは、ヴィシュヌローカの飛行船のようにあるいは燃料など使わずに飛べるような飛行船を作ってみせればいいのです。

第３１節

तदा दुन्दुभयो नेदुर्मृदङ्गपणवादयः ।
गन्धर्वमुख्याः प्रजगुः पेतुः कुसुमवृष्टयः ॥ ३१ ॥

タダー　ドゥンドゥバハヨー　ネードゥル
tadā dundubhayo nedur

ムリダンガ・パナヴァーダヤハ
mṛdaṅga-paṇavādayaḥ

ガンダハルヴァ・ムキヒァーハ　プラジャグフ
gandharva-mukhyāḥ prajaguḥ

ペートゥフ　クスマ・ヴリシュタヤハ
petuḥ kusuma-vṛṣṭayaḥ

tadā—その時; *dundubhayaḥ*—ケトルドラム; *neduḥ*—鳴り響いた; *mṛdaṅga*—太鼓; *paṇava*—小さな太鼓; *ādayaḥ*—その他; *gandharva-mukhyāḥ*—ガンダルヴァローカの筆頭の住人; *prajaguḥ*—歌った; *petuḥ*—降らせた; *kusuma*—花; *vṛṣṭayaḥ*—雨のように。

そのとき、空から太鼓やケトルドラムの音が鳴りひびき、ガンダルヴァ惑星の筆頭者が歌いはじめ、半神たちが空からドゥルヴァ・マハーラージャにむかって雨のように花を降らせはじめた。

第３２節

स च स्वर्लोकमारोक्ष्यन् सुनीतिं जननीं ध्रुवः ।
अन्वस्मरदगं हित्वा दीनां यास्ये त्रिविष्टपम् ॥ ३२ ॥

サ　チャ　スヴァルローカンム　アーロークッシャン
sa ca svarlokam ārokṣyan

スニーティンム　ジャナニーンム　ドフウルヴァハ
sunītiṁ jananīṁ dhruvaḥ

アンヴァスマラドゥ　アガンム　ヒトゥヴァー
anvasmarad agaṁ hitvā

ディーナーンム　ヤーッシェー　トゥリ・ヴィシュタパンム
dīnāṁ yāsye tri-viṣṭapam

saḥ—彼は; *ca*—もまた; *svaḥ-lokam*—その神々しい飛行船に; *ārokṣyan*—乗ろうとしたそのとき; *sunītim*—スニーティ; *jananīm*—母親; *dhruvaḥ*—ドゥルヴァ・マハーラージャ; *anvasmarat*—すぐに思い出した; *agam*—得ることが難しい; *hitvā*—後に残して; *dīnām*—哀れな; *yāsye*—私は行く; *tri-viṣṭapam*—ヴァイクンタ惑星に。

ドゥルヴァが崇高な飛行船に座り、今しもヴァイクンタに向けて飛びとうとしたとき、かれは哀れな母スニーティを思いだした。そして「かわいそうな母を残して、私ひとりヴァイクンタ惑星に行けるものだろうか」と考えた。

要旨解説

ドゥルヴァは母親のスニーティに深い恩を感じていました。主ヴィシュヌの従者とともにヴァイクンタに行くきっかけを教えたのはほかならぬスニーティだったのです。そして今母親のことを思いだし、ヴァイクンタに連れていきたいと考えました。じつは、母スニーティはドゥルヴァにとって*patha-pradarśaka-guru*（パタハ・プラダルシャカ・グル）「道をしめしたグル・精神指導者」でした。そのようなグルはときにシクシャー・グル（*śikṣā-guru*）と呼ばれます。ドゥルヴァにとってはナーラダ・ムニがディークシャー・グル（*dīkṣā-guru*）「入門する精神指導者」でしたが、母親のスニーティは、最高人格主神の恩寵をさずかる方法を最初にあたえた人です。シクシャー・グルやディークシャー・グルの義務は、弟子を正しく教えることにあり、その方法を実践するかどうかは弟子にかかっています。シャーストラの教えでは、シクシャー・とディークシャー・グルに違いはなく、ふつうシクシャー・グルがのちにディークシャー・グルになります。しかしスニーティが女性だったことから、またとくに母親だったことから、ドゥルヴァ・マハーラージャのディークシャー・グルにはなれませんでした。それでもドゥルヴァは、スニーティへの恩義を忘れていたわけではありません。ナーラダ・ムニをヴァイクンタローカに連れていくことはありえませんが、ドゥルヴァ・マハーラージャは母親のことをそのように考えていました。
最高人格主神が思いえがく計画はすぐに実現されます。同じように、至高主に完全に身をゆだねている献愛者は、自分の思いを主の恩寵をとおして叶えます。主は自分の思いを独自に実現させますが、献愛者は自分の望みを最高人格主神にまかせることで実現させます。ですから、ドゥルヴァ・マハーラージャが自分の哀れな母親に思いをめぐらせたとき、スニーティは別の飛行船でヴァイクンタローカにむかっている、とヴィシュヌの従者たちに告げられ

ました。ドゥルヴァ・マハーラージャは、母親を残したまま自分だけがヴァイクンタローカに向かっていると考えましたが、それでは、これまでなにからなにまで世話になったスニーティを見捨ててひとりでヴァイクンタローカに行くと人々に非難されることでしょうから、たしかに吉兆なこととはいえません。しかしドゥルヴァは、自分が至高者でないこともわかっていました。ですから、クリシュナが望みを叶えてくれるのであれば、そのときはじめて可能になることです。クリシュナはすぐにドゥルヴァの心を読みとり、母親もいっしょにヴァイクンタに向かっている、と話しました。この出来事は、ドゥルヴァ・マハーラージャのような心のきれいな献愛者はどのような望みでも満たすことができる、という事実をしめしています。ドゥルヴァは主の恩寵によってまさに主のようになり、いつなにを思おうと、その願いはすぐに実現されるのです。

第３３節

इति व्यवसितं तस्य व्यवसाय सुरोत्तमौ ।
दर्शयामासतुर्देवीं पुरो यानेन गच्छतीम् ॥ ३३ ॥

イティ　ヴャヴァシタンム　タッシャ
iti vyavasitaṁ tasya

ヴャヴァサーヤ　スローッタマウ
vyavasāya surottamau

ダルシャヤーンム　アーサトゥル　デーヴィーンム
darśayām āsatur devīṁ

プロー　ヤーネーナ　ガッチハャティーンム
puro yānena gacchatīm

iti—そのように; *vyavasitam*—熟考; *tasya*—ドゥルヴァの; *vyavasāya*—理解している; *sura-uttamau*—二人の筆頭の従者; *darśayām āsatuḥ*—示した（彼に）; *devīm*—高貴なスニーティ; *puraḥ*—前に; *yānena*—飛行船で; *gacchatīm*—進んでいる。

ヴァイクンタローカのふたりの優れた従者、ナンダとスナンダは、ドゥルヴァ・マハーラージャの心を理解し、母スニーティが別の飛行船でヴァイクンタに向かっていることをしめした。

要旨解説

この出来事が証明していることは、ドゥルヴァ・マハーラージャのように堅固な奉仕をする弟子を持つシクシャーあるいはディークシャー・グルは、教える側がそれほど高められて

いなくても、その弟子によって導かれるということです。スニーティはドゥルヴァ・マハーラージャの指導者でしたが、女性だったことから、森に入ることも、ドゥルヴァ・マハーラージャがしたような苦行や改悛をすることもできませんでした。それでも、ドゥルヴァ・マハーラージャは母親を連れていくことができました。同じように、プラフラーダ・マハーラージャも無神論の父親・ヒラニャカシプを救っています。結論として、ひじょうに堅固な献愛者である弟子や子孫は、自分の父親、母親、シクシャー・グル、ディークシャー・グルをヴァイクンタローカに連れていくことができる、と言えます。シュリーラ・バクティシッダーンタ・サラスヴァティー・タークラは、「たったひとりの魂をふるさとに、神の元に返して救うことができたら、クリシュナ意識を広めるという私の使命は成功したと考える」とよく語っておられました。クリシュナ意識運動は今全世界に広がりをみせていますが、ときに思うことがあります——私はいろいろな面で無能さを感じてはいますが、弟子のひとりでもドゥルヴァ・マハーラージャほどの堅固な献愛者になれば、その人物が私をヴァイクンタローカにいっしょに連れていってくれる、と。

第３４節

तत्र तत्र प्रशंसद्भिः पथि वैमानिकैः सुरैः ।
अवकीर्यमाणो ददृशे कुसुमैः क्रमशो ग्रहान् ॥ ३४ ॥

タトゥラ　タトゥラ　プラシャンムサドゥビヒヒ
tatra tatra praśaṁsadbhiḥ

パテヒィ　ヴァイマーニカイヒ　スライヒ
pathi vaimānikaiḥ suraiḥ

アヴァキーリャマーノー　ダドゥリシェー
avakīryamāṇo dadṛśe

クスマイヒ　クラマショー　グラハーン
kusumaiḥ kramaśo grahān

tatra tatra—ここかしこに; *praśaṁsadbhiḥ*—ドゥルヴァ・マハーラージャを讃える人々によって; *pathi*—途中で; *vaimānikaiḥ*—さまざまな形の飛行船によって運ばれて; *suraiḥ*—半神たちによって; *avakīryamāṇaḥ*—覆われて; *dadṛśe*—見ることができた; *kusumaiḥ*—花で; *kramaśaḥ*—次々に; *grahān*—太陽系の全惑星。

ドゥルヴァ・マハーラージャが宇宙を飛びつづけていたとき、やがて太陽系の全惑星が視界に入ってきた。そして、飛行船にのった半神たちがドゥルヴァにむけて雨のように花びらを降らせている様子を見ることができた。

要旨解説

ヴェーダ経典（『ムンダカ・ウパニシャッド』第１章・第３節）には、*yasmin vijñāte sarvam evaṁ vijñātaṁ bhavati*（ヤスミン　ヴィギャーテー　サルヴァンム　エーヴァンム　ヴィギャータンム　バハヴァンティ）という節があります。「最高人格主神を知る献愛者には、すべてが明らかになる」という意味です。同じように、最高人格主神の惑星に行く人物は、ヴァイクンタにむかう途中にある他の天体系すべてを見ることができます。ドゥルヴァ・マハーラージャの体は、私たちの体は違っていることを理解しておかなくてはなりません。ヴァイクンタの飛行船に乗りこむとき、その体は黄金の色をした完全に精神的な体に変化しています。物質の体を持つ魂は高位の惑星を超えることはできませんが、精神的な体を得れば物質界の高位の惑星はおろか、さらに高位の惑星、すなわちヴァイクンタローカの天体系にでさえ行くことができます。ナーラダ・ムニが、精神界・物質界のどこでも行けることは広く知られています。
ここで理解しておくべきことは、スニーティがヴァイクンタローカに向かうとき、その体も精神的な体に変わっていた、という点です。シュリー・スニーティのように、母親は、自分の子どもをドゥルヴァ・マハーラージャのような献愛者に育てなくてはなりません。スニーティはまだ５歳の我が子にむかって、世俗を捨てて森に入り、至高主を探しもとめるよう教えました。自分の子がいつまでも快適な家庭にとどまって、最高人格主神の恩寵を得るための苦行や改悛をしない生活をすることは望んでいませんでした。すべての母親は、スニーティのように、我が子を５歳からブラフマチャーリーになるよう教育し、精神的悟りが得られる苦行や改悛の生活をするよう育てなくてはなりません。その恩恵として、我が子がドゥルヴァのような堅固な献愛者になれば、その子はふるさとへ、神の元に帰ることはまちがいなく、さらに自分は献愛奉仕の苦行や改悛ができなくても、我が子といっしょに精神界に移される、という結果が待っているのです。

第３５節

त्रिलोकीं देवयानेन सोऽतिव्रज्य मुनीनपि ।
परस्ताऽद् ध्रुवगतिर्विष्णोः पदमथाभ्यगात् ॥ ३५ ॥

トゥリ・ローキンム　デーヴァ・ヤーネーナ
tri-lokīṁ deva-yānena

ソー　ティヴラッジャ　ムニーン　アピ
so 'tivrajya munīn api

パラスタードゥ　ヤドゥ　ドゥルヴァ・ガティル
parastād yad dhruva-gatir

ヴィシュノーホ　パダンム　アタハービャガートゥ
viṣṇoḥ padam athābhyagāt

tri-lokīm—３つの天体系; *deva-yānena*—その崇高な飛行船によって; *saḥ*—ドゥルヴァ; *ativrajya*—通過して; *munīn*—偉大な聖者たち; *api*—でさえ; *parastāt*—～を超えて; *yat*—であるもの; *dhruva-gatiḥ*—永遠の生活を達成したドゥルヴァ; *viṣṇoḥ*—主ヴィシュヌの; *padam*—住居; *atha*—そのとき; *abhyagāt*—到達した。

こうしてドゥルヴァ・マハーラージャは、サプタリシとして知られる偉大な聖者たちの住む７つの天体系を通過した。そして、その領域を超えた世界で、主ヴィシュヌの住む惑星のなかで永遠の生活という崇高な境地に到達した。

要旨解説

飛行船は、スナンダとナンダという主ヴィシュヌのふたりの主要な従者によって操縦されていました。そのような精神的な宇宙飛行士だけが、飛行船を操作して７つの惑星を超え、永遠の生活に満ちた世界に到達することができます。『バガヴァッド・ギーター』（第８章・第20節）でも*paras tasmāt tu bhāvo 'nyaḥ*（パラス　タスマートゥ　トゥ　バハーヴォー　ニャハ）、「この天体系を超えた領域から精神界がはじまり、そこには永遠の至福に満ちた生活がある」と確証されています。その世界の惑星は、ヴィシュヌローカあるいはヴァイクンタローカと知られています。そこでしか、知識に満ちた永遠で至福の生活を得ることはできません。ヴァイクンタローカの下には物質宇宙が広がっており、そこにあるブラフマローカに主ブラフマーや他の生命体たちがこの宇宙が破壊されるまで生きていますが、その生活は永遠ではありません。これは『バガヴァッド・ギーター』で*ābrahma-bhuvanāl lokāḥ*（アーブラフマ・ブヴァナール　ローカーハ）と確証されています。その頂点の惑星に行っても、永遠の生活を手にいれることはできません。ヴァイクンタローカに到達してこそ、至福に満ちた永遠の生活を満喫するができるのです。

第３６節

यद् भ्राजमानं स्वरुचैव सर्वतो
　　लोकास्त्रयो ह्यनु विभ्राजन्त एते　।
यन्नाव्रजञ्जन्तुषु येऽननुग्रहा
　　व्रजन्ति भद्राणि चरन्ति येऽनिशम् ॥ ३६ ॥

ヤドゥ　ブァラージャマーナンム　スヴァ・ルチャイヴァ　サルヴァトー
yad bhrājamānaṁ sva-rucaiva sarvato

ローカース　トゥラヨー　ヒ　アヌ　ヴィブァラージャンタ　エーテー
lokās trayo hy anu vibhrājanta ete

ヤン　ナーヴラジャン　ジャントゥシュ　イェー　ナヌグラハー
yan nāvrajañ jantuṣu ye 'nanugrahā

ヴラジャンティ　バハドゥラーニ　チャランティ　イェー　ニシャンム
vrajanti bhadrāṇi caranti ye 'niśam

yat—〜である惑星; *bhrājamānam*—輝いている; *sva-rucā*—自らの光輝によって; *eva*—だけ; *sarvataḥ*—どこでも; *lokāḥ*—天体系; *trayaḥ*—３; *hi*—確かに; *anu*—そこに; *vibhrājante*—光を放つ; *ete*—これら; *yat*—惑星; *na*—ではない; *avrajan*—到達した; *jantuṣu*—生命体に; *ye*—〜である者たち; *ananugrahāḥ*—無慈悲な; *vrajanti*—到達する; *bhadrāṇi*—福祉活動; *caranti*—〜に従事する; *ye*—〜である者たち; *aniśam*—常に。

物質界にあるすべての恒星は自ら光輝くヴァイクンタ惑星が放つ光を受けて光っている。他の生命体に慈悲心のない者たちはヴァイクンタ惑星には決して行くことができない。他の生命体の幸福を願う活動をする人々だけがヴァイクンタ惑星に到達することができる。

要旨解説

この節では、ヴァイクンタ惑星の２つの様相が描写されています。まず、ヴァイクンタには太陽や月の必要がない、という点です。このことはウパニシャッドで述べられ、また『バガヴァッド・ギーター』（第15章・第６節）で*na tad bhāsayate sūryo na śaśāṅko na pāvakaḥ*（ナ　タドゥ　バハーサヤテー　スーリョー　ナ　シャシャーンコー　ナ　パーヴァカハ）と確証されています。精神界のなかで、ヴァイクンタローカは自ら光りかがやいています。太陽、月、電気の光を必要としていない、ということです。じつに、ヴァイクンタローカの光が物質界に反射しているのです。この光があるからこそ、物質界にある太陽が輝いています。太陽がその光を受けることで、他の星や月が輝くようになります。言いかえると、物質界にある発光体はヴァイクンタローカの光を借用している、ということになります。しかし物質界にいる人でも、他のすべての生命体の幸福のためにいつも活動していれば、ヴァイクンタローカに行くことができます。そのようなたえまない福利活動は、クリシュナ意識だけをとおして実践できることです。物質界では、私たちを１日24時間仕えさせてくれるクリシュナ意識以外に慈善活動はありません。

クリシュナ意識の人物は、苦しむ人類をふるさとへ、神の元へ返す計画をいつもたてています。そして、堕落した魂をすべて神の元へ返すことができなかったとしても、その人物はクリシュナ意識ですから、ヴァイクンタローカへの道は大きく開かれています。みずからヴァイクンタローカに入る資格を得ますし、その献愛者に従う人もヴァイクンタローカに入ることができます。それ以外の、嫉妬心に駆られたおこないをする人々はカルミーと呼ばれてい

ます。カルミーたちは互いに憎みあっています。ただ感覚を満たすためだけに、悪いことをしたわけではない動物たちを数かぎりなく殺しています。ギャーニーはカルミーほどの罪をおかしてはいませんが、他の人々を神のもとへ返そうとはしません。苦行をしているのは自分だけの解放のためです。ヨーギーにしても、神秘的な力を得るために自分の能力を高めようとしています。しかし、主の召使いである献愛者・ヴァイシュナヴァは、クリシュナ意識をとおして、堕落した魂たちを救うためにじっさいに行動します。クリシュナ意識の人物だけが精神界に入ることができます。そのことがこの節で明確に述べられ、また主が『バガヴァッド・ギーター』でも確証しています、『バガヴァッド・ギーター』が説く真理を世界の人々に広める人物ほど愛しい者はいない、ということばで。

第３７節

शान्ताः समदृशः शुद्धाः सर्वभूतानुरञ्जनाः ।
यान्त्यञ्जसाच्युतपदमच्युतप्रियबान्धवाः ॥ ३७ ॥

シャーンターハ　サマ・ドゥリシャハ　シュッダハーハ
śāntāḥ sama-dṛśaḥ śuddhāḥ

サルヴァ・ブゥーターヌランジャナーハ
sarva-bhūtānurañjanāḥ

ヤーンティ　アンジャサーチュタ・パダンム
yānty añjasācyuta-padam

アチュタ・プリヤ・バーンダハヴァーハ
acyuta-priya-bāndhavāḥ

śāntāḥ—心穏やかな; *sama-dṛśaḥ*—公平な; *śuddhāḥ*—心の清潔な、浄化された; *sarva*—すべて; *bhūta*—生命体たち; *anurañjanāḥ*—喜んでいる; *yānti*—行く; *añjasā*—簡単に; *acyuta*—主の; *padam*—その住居に; *acyuta-priya*—主の献愛者とともに; *bāndhavāḥ*—友人たち。

心穏やかで、公平な心をもち、清潔で、純粋な心をもち、すべての生命体を喜ばせるすべを知る人々は、主の献愛者だけと友人関係を保つ。そのような人々だけが、ふるさとへ、神のもとへ帰る完成境地にたやすく到達できる。

要旨解説

この節は、献愛者だけが神の世界に入ることができるという事実を完全に説明しています。最初に挙げられているのは、献愛者は自分の感覚満足を要求しないから心が穏やかである、

という点です。ただひたすら主への奉仕に打ちこんでいるのです。カルミーはこの穏やかな心にはなれません。際限なく感覚満足を求めているからです。ギャーニーも、解脱をもとめたり至高者のなかに没入したりすることしか眼中にないため、穏やかな心にはなれません。同じくヨーギーも、神秘的な力を得るために心の落ちつきを失っています。しかし、献愛者は心が満ち足りています。最高人格主神にすっかり身をゆだねていますし、自分が無力であることを知っているからです。子どもが両親にすべてをまかせて安心しきっているように、献愛者は最高人格主神の慈悲にすがっていますから、完全に平安な心をもっています。
献愛者は平等な心をもっています。だれをも同じ超越的境地にいるものとして見ています。条件づけられた魂が過去の物質的活動のためにある体をもっていても、ほんとうはだれもが至高主の部分体である、ということを知っています。献愛者はどのような生物も精神的な視野をとおして見つめますから、肉体観念にもとづく区別した見方はしません。そのような気質は献愛者とのふれあいのなかで生まれます。献愛者とのつきあいがなければ、クリシュナ意識を高めることはできません。筆者はそのためにクリシュナ意識国際協会を創設しました。じっさいに、この組織に加わっている人はだれでも、自然にクリシュナ意識を高めています。献愛者は最高人格主神にとって愛しく、最高人格主神は献愛者だけに愛しい存在です。この環境だけでしか、私たちはクリシュナ意識を高めることができません。クリシュナ意識を修練している人々、つまり主の献愛者はだれでも喜ばせることができます。それはクリシュナ意識運動が証明しています。私たちはだれかれ区別することなく、だれでも歓迎します。いっしょに座り、ハレー・クリシュナ・マントラを唱え、私たちが差しだすプラサーダをできるだけたくさん食べてもらい、こうしてだれもが私たちの応対に喜んでくれます。これが必要な資格です。*Sarva-bhūtānurañjanāḥ*（サルヴァ・ブフーターヌランジャナーハ）。純粋さについて言うならば、だれも献愛者ほど純粋ではありません。ヴィシュヌの名前をひとたび唱えた人は、内も外もすぐに浄化されます。そのことを*yaḥ smaret puṇḍarīkākṣam*（ヤハ　スマレートゥ　プンダリーカークシャンム）といいます。献愛者はいつもハレー・クリシュナ・マントラを唱えていますから、物質界のけがれは献愛者に触れることができません。ですから、ほんとうに純粋な境地にいます。*Muci haya śuci haya yadi kṛṣṇa bhaje*（ムチ　ハヤ　シュチ　ハヤ　ヤディ　クリシュナ　バハジェー）。これは、靴職人であっても、靴職人の家庭に生まれた人でも、クリシュナ意識を始めればブラーフマナ（シュチ）の境地に高められる、ということばです。純粋なクリシュナ意識のなかでハレー・クリシュナ・マントラを唱えている人々は、全宇宙でもっとも純粋な存在といえます。

第３８節

इत्युत्तानपदः पुत्रो ध्रुवः कृष्णपरायणः ।
अभूत्त्रयाणां लोकानां चूडामणिरिवामलः ॥ ३८ ॥

イティ　ウッターナパダハ　プトゥロー
ity uttānapadaḥ putro

ドゥルヴァハ　クリシュナ・パラーヤナハ
dhruvaḥ kṛṣṇa-parāyaṇaḥ

アブゥートゥ　トゥラヤーナーンム　ローカーナンム
abhūt trayāṇāṁ lokānāṁ

チューダー・マニル　イヴァーマラハ
cūḍā-maṇir ivāmalaḥ

iti—このように; *uttānapadaḥ*—マハーラージャ・ウッターナパーダの; *putraḥ*—子息; *dhruvaḥ*—ドゥルヴァ・マハーラージャ; *kṛṣṇa-parāyaṇaḥ*—完全にクリシュナ意識; *abhūt*—〜になる; *trayāṇām*—その３つの; *lokānām*—世界; *cūḍā-maṇiḥ*—頂点の宝石; *iva*—〜のような; *amalaḥ*—浄化されて。

こうして、完全にクリシュナ意識で、マハーラージャ・ウッターナパーダの気高い子息ドゥルヴァ・マハーラージャは、３つの天体系の頂点に到達した。

要旨解説

クリシュナ意識を指す正確なサンスクリット語がこの節で*kṛṣṇa-parāyaṇaḥ*（クリシュナ・パラーヤナハ）と表現されています。パラーヤナハ（*parāyaṇa*）は、「前進する」という意味です。クリシュナという目標にむかって前進している人をパラーヤナハ、すなわち完全にクリシュナ意識の人物といいます。ドゥルヴァ・マハーラージャの例から、クリシュナ意識の人はだれでも、宇宙の全三天体系の頂点に到達できる、という点が理解できます。クリシュナ意識の人物は、野心をもつ物質主義者の想像を超えるほどの高尚な地位につくことができるのです。

第３９節

गम्भीरवेगोऽनिमिषं ज्योतिषां चक्रमाहितम् ।
यस्मिन् भ्रमति कौरव्य मेढ्यामिव गवां गणः ॥ ३९ ॥

ガンムビヒーラ・ヴェーゴー　ニミシャンム
gambhīra-vego 'nimiṣaṁ

ジョーティシャーンム　チャクランム　アーヒタンム
jyotiṣāṁ cakram āhitam

ヤスミン　ブゥラマティ　カウラヴァ
yasmin bhramati kauravya

メーデヘャーンム　イヴァ　ガヴァーンム　ガナハ
meḍhyām iva gavāṁ gaṇaḥ

gambhīra-vegaḥ—猛烈な力と速度で; *animiṣam*—絶え間なく; *jyotiṣām*—恒星の; *cakram*—球体; *āhitam*—結ばれて; *yasmin*—〜の周囲; *bhramati*—周回する; *kauravya*—ヴィドゥラよ; *meḍhyām*—中心の棒; *iva*—〜のように; *gavām*—雄牛の; *gaṇaḥ*—群れ。

聖者マイトゥレーヤがことばをつづける。「クル王家の末裔、ヴィドゥラよ。あたかも雄牛の群れが中央に立つ棒を右にして回るように、宇宙のすべての恒星が、猛烈な力と速度でドゥルヴァ・マハーラージャの住居をたえまなく周回している」

要旨解説

宇宙のすべての惑星が猛烈なスピードで飛行しています。『シュリーマド・バーガヴァタム』の記述によると、太陽も秒速16,000マイル（約26,000キロ）で飛行していることがわかり、また『ブラフマ・サムヒター』のシュローカでは*yac-cakṣur eṣa savitā sakala-grahāṇām*（ヤッチャクスル　エーシャ　サヴィター　サカラ・グラハーナーンム）とあり、太陽は最高人格主神ゴーヴィンダの目とされ、特定の軌道をもつ、と述べられています。同じように、他の惑星すべても特定の軌道をもっています。しかしそのすべての惑星が、ドゥルヴァ・マハーラージャが三界の頂点として住む北極星、すなわちドゥルヴァローカを周回しています。献愛者がどれほど気高い地位にいるのか、私たちにはただ想像するしかありませんし、まして最高人格主神がどれほど高貴な地位にあるのか理解することはできません。

第４０節

महिमानं विलोक्यास्य नारदो भगवानृषिः ।
आतोद्यं वितुदञ् श्लोकान् सत्रेऽगायत्प्रचेतसाम् ॥ ४० ॥

マヒマーナンム　ヴィローキャーッシャ
mahimānaṁ vilokyāsya

ナーラドー　バハガヴァーン　リシヒ
nārado bhagavān ṛṣiḥ

アートーデャンム　ヴィトゥダーン　シュローカーン
ātodyaṁ vitudañ ślokān

サトゥレー　ガーヤトゥ　プラチェータサーンム
satre 'gāyat pracetasām

mahimānam—栄光; *vilokya*—見ている; *asya*—ドゥルヴァ・マハーラージャの; *nāradaḥ*—偉大な聖者ナーラダ; *bhagavān*—最高人格主神ほどに高尚な; *ṛṣiḥ*—聖者; *ātodyam*—弦楽器、ヴィーナー; *vitudan*—を演奏している; *ślokān*—節; *satre*—儀式の場で; *agāyat*—唱えた; *pracetasām*—プラチェーターたちの。

ドゥルヴァ・マハーラージャの栄光を見ていた偉大な聖者ナーラダは、ヴィーナーを奏でながら、プラチェーターたちが執行していた儀場をたずね、このうえない幸せな思いで、つぎのような３つの詩歌を唱えた。

要旨解説

偉大な聖者ナーラダはドゥルヴァ・マハーラージャの精神指導者です。ドゥルヴァの栄光を見て、心から喜んだことにまちがいありません。父親は我が子があらゆる面で高められることをとても喜ぶように、精神指導者は弟子の精神的高まりを見て心から嬉しく思います。

第４１節

नारद उवाच

नूनं सुनीतेः पतिदेवताया-
स्तपःप्रभावस्य सुतस्य तां गतिम् ।
दृष्ट्वाभ्युपायानपि वेदवादिनो
नैवाधिगन्तुं प्रभवन्ति किं नृपाः ॥ ४१ ॥

ナーラダ　ウヴァーチャ
nārada uvāca

ヌーナンム　スニーテーヘ　パティ・デーヴァターヤース
nūnaṁ sunīteḥ pati-devatāyās

タパハ・プラバハーヴァッシャ　スタッシャ　ターンム　ガティンム
tapaḥ-prabhāvasya sutasya tāṁ gatim

ドゥリシュトゥヴァービヒュパーヤーン　アピ　ヴェーダ・ヴァーディノー
dṛṣṭvābhyupāyān api veda-vādino

ナイヴァーデヒィガントゥンム　プラバハヴァンティ　キンム　ヌリパーハ
naivādhigantuṁ prabhavanti kiṁ nṛpāḥ

nāradaḥ uvāca—ナーラダが言った; *nūnam*—確かに; *sunīteḥ*—スニーティの; *pati-devatāyāḥ*—夫に強く執着して; *tapaḥ-prabhāvasya*—苦行の力によって; *sutasya*—息子の; *tām*—その; *gatim*—地位; *dṛṣṭvā*—見ている; *abhyupāyān*—その方法; *api*—〜ではあ

るけれども; *veda-vādinaḥ*—ヴェーダ原則に厳格に従う者たち、あるいはいわゆるヴェーダーンタ学者たちの; *na*—決して～ない; *eva*—確かに; *adhigantum*—到達すること; *prabhavanti*—できる; *kim*—～は言うまでもない; *nṛpāḥ*—ありふれた王たち。

偉大な聖者ナーラダが言った。「夫に献身的なスニーティの子であるドゥルヴァ・マハーラージャは、その精神的高まりと力あふれる苦行によって高貴な境地に到達した。それは、ヴェーダ原則に厳格に従ういわゆるヴェーダーンタ学者に、ましてふつうの魂にはとうていかなわない境地である」

要旨解説

この節にある*veda-vādinaḥ*（ヴェーダ・ヴァーディナハ）はひじょうに重要な意味があります。一般に、ヴェーダ原則に厳格に従う人々をヴェーダ・ヴァーディ（*veda-vādi*）といいます。また、みずからヴェーダーンタ哲学の従者と呼ぶいわゆるヴェーダーンタ学者がいますが、かれらはヴェーダーンタをまちがって解説しています。*Veda-vāda-ratāḥ*（ヴェーダ・ヴァーダ・ラターハ）という語句は『バガヴァッド・ギーター』でも使われており、ヴェーダの意味を理解せずに、ただヴェーダに執着している人々を指します。そのような人々はヴェーダについて語りあったり、自分流の苦行をしたりするのですが、ドゥルヴァ・マハーラージャのような高貴な境地に到達することはできません。ありきたりの王には、まったくその可能性はありません。王についてここで特に言及されていることは重要な意味があります。それは、いにしえの王たちも聖者ほどの気質をそなえ、ラージャルシと呼ばれていたからです。ドゥルヴァ・マハーラージャは王であり、そして偉大な聖者ほど博学な人物でした。しかし、献愛奉仕をしなければ、偉大な王であろうと、クシャトリヤであろうと、あるいはヴェーダ原則に厳格に従う偉大なブラーフマナであろうと、ドゥルヴァ・マハーラージャが達成した高貴な境地に到達することはできません。

第４２節

यः पञ्चवर्षो गुरुदारवाक्शरै-
　　र्भिन्नेन यातो हृदयेन दूयता ।
वनं मदादेशकरोऽजितं प्रभुं
　　जिगाय तद्भक्तगुणैः पराजितम् ॥ ४२ ॥

ヤハ　パンチャ・ヴァルショー　グル・ダーラ・ヴァーク・シャライル
yaḥ pañca-varṣo guru-dāra-vāk-śarair

ビヒンネーナ　ヤートー　フリダイェーナ　ドゥーヤター
bhinnena yāto hṛdayena dūyatā

ヴァナンム　マドゥ・アーデーシャ・カロー　ジタンム　プラブァンム
vanaṁ mad-ādeśa-karo 'jitaṁ prabhuṁ

ジガーヤ　タドゥ・バハクタ・グナイヒ　パラージタンム
jigāya tad-bhakta-guṇaiḥ parājitam

yaḥ—彼は; *pañca-varṣaḥ*—５歳のときに; *guru-dāra*—父親の妻の; *vāk-śaraiḥ*—辛辣な言葉によって; *bhinnena*—非常に苦しんで; *yātaḥ*—行った; *hṛdayena*—彼の心ゆえに; *dūyatā*—大きな苦痛を感じて; *vanam*—森に; *mat-ādeśa*—私の指示に従って; *karaḥ*—行動している; *ajitam*—克服できない; *prabhum*—最高人格主神; *jigāya*—彼は克服した; *tat*—主の; *bhakta*—献愛者たちの; *guṇaiḥ*—その気質で; *parājitam*—克服した。

偉大な聖者ナーラダがことばをつづけた。「ドゥルヴァ・マハーラージャは、継母の突き刺すようなことばで心に傷を受け、５歳でありながら森に入り、私の指示に従って苦行を修練した。最高人格主神はだれにも克服されない、が、ドゥルヴァ・マハーラージャは、主の献愛者がもつ特別の気質で主を手に入れたのである」

要旨解説

至高主神は征服されません。だれも主を打ち負かすことはできないのです。しかし主は、献愛者がそなえる愛情奉仕の気質には自分のほうから従います。たとえば、主クリシュナは母親ヤショーダーの命令に従いました。偉大な献愛者だったからです。主は、献愛者に支配されることを好みます。『チャタンニャ・チャリタームリタ』で述べられているように、だれもが主に高尚な祈りのことばをささげますが、主は、そのような祈りを献愛者が純粋な愛情から口にしたり、あるいはまるで目下の者のように叱られたりするときに大きな喜びを感じます。主は自分の崇高な立場を忘れ、純粋な献愛者の言われるままになろうとするのです。ドゥルヴァ・マハーラージャは至高主を征服しましたが、それはたった５歳という幼いときに、献愛奉仕のすべての苦行を修練したからです。もちろんその奉仕は、偉大な聖者ナーラダの指示のもとで実行されました。これが献愛奉仕の最初の原則です——*ādau gurv-āśrayam*（アーダウ　グルヴ・アーシュラヤンム）。最初に真正な精神指導者を受けいれなくてはなりません。そして、ドゥルヴァ・マハーラージャがナーラダ・ムニの教えに従ったように、精神指導者の指導に厳格に従えば、主の恩寵を苦もなくさずかることができます。
献愛奉仕の要点は、クリシュナへの無垢な愛情を高めることにあります。このクリシュナへの純粋な愛情は、クリシュナについて聞くだけで得ることができます。主チャイタンニャはこの原則を受けいれました——どのような立場にあっても、クリシュナが語った、あるいはクリシュナについて語られた超越的な教えをすなおに聞けば、しだいに純粋な愛情が深まり、その愛情だけによって、征服されない方を征服することができます。マーヤーヴァーディー

哲学者は至高主と一体化することを渇望していますが、献愛者はその境地さえ超えます。至高主と一体になるだけではなく、主の父親、母親、あるいは主人にでさえなります。アルジュナも、献愛奉仕をとおして、主クリシュナを自分の戦闘馬車の御者としました。主に、「私の馬車をここへ移動するように」と命じ、主はその命令を実行しました。これが、征服できない方を征服する、という高貴な境地を得るという献愛者の実例です。

第４３節

यः क्षत्रबन्धुर्भुवि तस्याधिरूढ-
मन्वारुरुक्षेदपि वर्षपूगैः ।
षट्पञ्चवर्षो यदहोभिरल्पैः
प्रसाऊ वैकुण्ठमवाप तत्पदम् ॥ ४३ ॥

ヤハ　クシャトゥラ・バンドゥフル　ブヴィ　タッシャーデヒィルーダハンム
yaḥ kṣatra-bandhur bhuvi tasyādhirūḍham

アンヴ　アールルクシェードゥ　アピ　ヴァルシャ・プーガイヒ
anv āruruksed api varṣa-pūgaiḥ

シャトゥ・パンチャ・ヴァルショー　ヤドゥ　アホービヒィル　アルパイヒ
ṣaṭ-pañca-varṣo yad ahobhir alpaiḥ

プラサーデャ　ヴァイクンタハンム　アヴァーパ　タトゥ・パダンム
prasādya vaikuṇṭham avāpa tat-padam

yaḥ—～である者; *kṣatra-bandhuḥ*—クシャトリヤの子; *bhuvi*—地上で; *tasya*—ドゥルヴァの; *adhirūḍham*—気高い地位; *anu*—その後; *ārurukset*—到達することを熱望する; *api*—～でさえ; *varṣa-pūgaiḥ*—長年の後; *ṣaṭ-pañca-varṣaḥ*—５～６歳; *yat*—～であること; *ahobhiḥ alpaiḥ*—数年後; *prasādya*—喜ばせた後; *vaikuṇṭham*—主; *avāpa*—達成した; *tat-padam*—主の住居。

ドゥルヴァ・マハーラージャは、５～６歳のとき、６ヶ月間の苦行のあとに気高い境地を達成した。じつに驚くべきことではないか！　偉大なクシャトリヤでさえ、長い歳月をとおして苦行をつづけてもそのような境地には到達できないのだから。

要旨解説

この節ではドゥルヴァ・マハーラージャのことが*kṣatra-bandhuḥ*（クシャトゥラ・バンドゥフ）と表現されていますが、それは、５歳にすぎなかったドゥルヴァがクシャトリヤとして十分な訓練を受けていなかったことを指しています。円熟したクシャトリヤではなかった、とい

うことです。クシャトリヤやブラーフマナになるには指導を受けなくてはなりません。ブラーフマナの家庭に生まれた少年は即ブラーフマナ、というわけではありません。それなりの指導を受け、浄化手段を受ける必要があるのです。

偉大な聖者ナーラダ・ムニは、ドゥルヴァ・マハーラージャのような献愛者・弟子がいることに大きな誇りを感じています。ほかにも数多くの弟子がいるのですが、とくにドゥルヴァ・マハーラージャにはとても満足しています。厳しい苦行と改悛の力によって、全宇宙の王子あるいはラージャルシが決して到達できなかったヴァイクンタに、一生涯で到達したからです。偉大なバラタ王の話があります。優れた献愛者でしたが、ヴァイクンタローカには３回の生涯のあとに到達しました。最初の生涯では森で厳しい修行をしましたが、子鹿にあまりにも心をうばわれて失敗し、次の生涯ではシカの体に入らなくてはなりませんでした。しかし、シカに生まれても精神的境地を覚えていました。それでも最終的完成を得るにはもう１回の生涯を迎えなくてはなりませんでした。そして次の生で、ジャダ・バラタ（Jaḍa Bharata）として誕生します。もちろん、その生涯では物質的な束縛から完全に解放され、完成を達成し、ヴァイクンタローカへ高められました。ドゥルヴァ・マハーラージャの生涯から得られる教えは、何度も生涯を繰りかえさなくても、１回の生涯でヴァイクンタローカに帰っていける、ということです。私のグル・マハーラージャ、シュリー・シュリマードゥ・バクティシッダーンタ・サラスヴァティー・ゴースヴァーミー・プラブパーダは、「私の弟子すべてが、次の生涯で献愛奉仕をしなくても、今の生涯でヴァイクンタローカに到達できる」、とよく語っておられました。ドゥルヴァ・マハーラージャのように、ひたすら真剣に、誠実に奉仕をしなくてはなりません。それができれば、この生涯を終えたときに、ヴァイクンタローカへ、ふるさとへ、神の元へかならず帰っていけるのです。

第４４節

मैत्रेय उवाच
एतत्तेऽभिहितं सर्वं यत्पृष्टोऽहमिह त्वया ।
ध्रुवस्योद्दामयशसꣳरितं सम्मतं सताम् ॥ ४४ ॥

マイトゥレーヤ　ウヴァーチャ
maitreya uvāca

エータトゥ　テー　ビヒタンム　サルヴァンム
etat te 'bhihitaṁ sarvaṁ

ヤトゥ　プリシュトー　ハンム　イハ　トゥヴァヤー
yat pṛṣṭo 'ham iha tvayā

ドゥルヴァッショーッダーマ・ヤシャサシュ
dhruvasyoddāma-yaśasaś

チャリタンム　サンマタンム　サターンム
caritaṁ sammataṁ satām

maitreyaḥ uvāca—偉大な聖者マイトゥレーヤが言った; *etat*—これ; *te*—あなたに; *abhihitam*—述べた; *sarvam*—すべて; *yat*—〜であるもの; *pṛṣṭaḥ aham*—私は尋ねられた; *iha*—ここで; *tvayā*—あなたによって; *dhruvasya*—ドゥルヴァ・マハーラージャの; *uddāma*—非常に高められている; *yaśasaḥ*—その人物の名声; *caritam*—気質; *sammatam*—認められて; *satām*—偉大な献愛者たちによって。

偉大な聖者マイトゥレーヤがことばをつづけた。「ヴィドゥラよ。ドゥルヴァ・マハーラージャの卓越した名声や気質についてあなたが尋ねたことについて、私はくわしく説明した。すぐれた聖者や献愛者たちは、ドゥルヴァ・マハーラージャについて聞くことを心から楽しんでいる」

要旨解説

『シュリーマド・バーガヴァタム』は、最高人格主神と関連したものすべてを指しています。至高主の崇高な娯楽や活動について聞くこと、あるいは主の献愛者の気質、名声、活動について聞くことは、どちらもひとつ、同じことです。初心の献愛者は、主の娯楽を理解しようとするのですが、献愛者の活動には関心がありません、しかし、ほんとうの献愛者はそのような区別した見方はしません。知性に欠ける人々はよくクリシュナのラーサ・ダンスについて聞こうとし、『シュリーマド・バーガヴァタム』のほかの箇所について聞くつもりはなく、まったく無視しようとしています。『シュリーマド・バーガヴァタム』の吟唱を職業にしている者たちがおり、『シュリーマド・バーガヴァタム』のラーサ・リーラー（*rāsa-līlā*）の章にすぐに入り、他の章には意味がないような読み方をします。このように区別したり、主のラーサ・リーラーの娯楽をいきなり読もうとしたりするのは、アーチャーリャに認められていません。誠実な献愛者は、『シュリーマド・バーガヴァタム』のすべての章やことばを読まなくてはなりません。この書物の最初の部分の節はすべてのヴェーダ経典の熟した果実、と言われているからです。献愛者は『シュリーマド・バーガヴァタム』のことばをひとつでもおろそかにしてはなりません。ですから偉大な聖者マイトゥレーヤはこの箇所で、『シュリーマド・バーガヴァタム』は*sammataṁ satām*（サンマタンム　サターンム）、偉大な献愛者たちに認められている、と断言しています。

第４５節

धन्यं यशस्यमायुष्यं पुण्यं स्वस्त्ययनं महत् ।
स्वर्ग्यं ध्रौव्यं सौमनस्यं प्रशस्यमघमर्षणम् ॥ ४५ ॥

ダハニャンム　ヤシャッシャンム　アーユッシャンム
dhanyaṁ yaśasyam āyuṣyaṁ

プニャンム　スヴァスティ・アヤナンム　マハトゥ
puṇyaṁ svasty-ayanaṁ mahat

スヴァルギャンム　ドゥラウヴャンム　サウマナッシャンム
svargyaṁ dhrauvyaṁ saumanasyaṁ

プラシャッシャンム　アガハ・マルシャナンム
praśasyam agha-marṣaṇam

dhanyam—富を授けること; *yaśasyam*—名声を授けること; *āyuṣyam*—寿命を延ばすこと; *puṇyam*—神聖な; *svasti-ayanam*—幸運を作りだすこと; *mahat*—偉大な; *svargyam*—天上の惑星に到達する恩恵を授けること; *dhrauvyam*—ドゥルヴァローカの; *saumanasyam*—心を満たしてくれる; *praśasyam*—輝かしい; *agha-marṣaṇam*—あらゆる罪な活動の反動を消し去る。

ドゥルヴァ・マハーラージャの伝記を聞くことで、富、名声、長寿への望みを満たすことができる。その吉兆さゆえに、ドゥルヴァ・マハーラージャについて聞くだけで、ドゥルヴァが到達したドゥルヴァローカあるいは天国の惑星に行くことができる。半神たちも、この話の栄光に心打たれて喜びを感じ、またその力強さが、聞く者の罪業の結果をことごとく消しさってくれる。

要旨解説

世界中にさまざまな人種が住んでいますが、そのすべてが純粋な献愛者というわけではありません。莫大な富をもとめているカルミーがいれば、名声だけをもとめている人間もいます。天国の惑星やドゥルヴァローカに高められたいと願ったり、物質的な利益をもとめて半神を崇拝したりする人々もいます。この節でマイトゥレーヤは、だれでもドゥルヴァ・マハーラージャの話を聞くことができ、望んでいる目標を手に入れることができる、と述べています。いっぽうで、献愛者（*akāma*・アカーマ）、カルミー（*sarva-kāma*・サルヴァ・カーマ）、解脱を望んでいるギャーニー（*mokṣa-kāma*・モークシャ・カーマ）たちは、それぞれが望んでいる人生の目標を達成するために最高人格主神を崇拝すべきである、とも勧められています。同じように、主の献愛者の活動について聞く人はだれでも同じ結果が得られます。最高人格主神の気質、そして純粋な献愛者の気質にはまったく違いがありません。

第４６節

श्रुत्वैतच्छ्रद्धयाभीक्ष्णमच्युतप्रियचेष्टितम् ।
भवेद्भक्तिर्भगवति यया स्यात्क्लेशसङ्क्षयः ॥ ४६ ॥

シュルトゥヴァイタチ　チャラッダヤービィークシュナンム
śrutvaitac chraddhayābhīkṣṇam

アチュタ・プリヤ・チェーシュティタンム
acyuta-priya-ceṣṭitam

バハヴェードゥ　バハクティル　バハガヴァティ
bhaved bhaktir bhagavati

ヤヤー　シャートゥ　クレーシャ・シャンクシャヤハ
yayā syāt kleśa-saṅkṣayaḥ

śrutvā—聞くことで; *etat*—これ; *śraddhayā*—信念で; *abhīkṣṇam*—繰り返し; *acyuta*—最高人格主神に; *priya*—親密な; *ceṣṭitam*—活動; *bhavet*—高める; *bhaktiḥ*—熱意; *bhagavati*—最高人格主神に; *yayā*—～によって; *syāt*—必ず～になる; *kleśa*—苦しみの; *saṅkṣayaḥ*—完全に減少する。

ドゥルヴァ・マハーラージャの偉人伝を聞く者は、そして信念と熱意とともにドゥルヴァの純粋無垢な気質を理解しようとする者は、純粋な献愛奉仕の境地に到達し、けがれのない奉仕をするようになる。そのような活動をとおして、条件づけられた物質生活にある三重の苦しみをやわらげることができる。

要旨解説

この節の*acyuta-priya*（アチュタ・プリヤ）はとても重要なことばです。ドゥルヴァ・マハーラージャの気質と名声がすばらしいのは、ドゥルヴァがアチュタ（Acyuta）、すなわち最高人格主神がいとおしいと思う献愛者だからです。至高主の崇高な娯楽や活動が耳に心地よいように、至高者がいとおしいと思う献愛者について聞くことも喜ばしいし、またその話には力がこめられています。この章をなんども読んだり聞いたりしてドゥルヴァ・マハーラージャについて深く知ることで、私たちが望む人生の最高完成に到達することができます。そしてとくに重要な点は、偉大な献愛者になる機会が得られるということです。偉大な献愛者になる、とは、物質生活のあらゆる苦しみを終わらせることができる、ということを意味しています。

第４７節

महत्त्वमिच्छतां तीर्थं श्रोतुः शीलादयो गुणाः ।
यत्र तेजस्तदिच्छूनां मानो यत्र मनस्विनाम् ॥ ४७ ॥

マハットゥヴァンム　イッチハャターンム　ティールタハンム
mahattvam icchatāṁ tīrthaṁ

シュロートゥフ　シーラーダヨー　グナーハ
śrotuḥ śīlādayo guṇāḥ

ヤトゥラ　テージャス　タドゥ　イッチフューナーンム
yatra tejas tad icchūnāṁ

マーノー　ヤトゥラ　マナスヴィナーンム
māno yatra manasvinām

mahattvam—偉大さ; *icchatām*—望んでいる者たちにとって; *tīrtham*—その方法; *śrotuḥ*—聞く者の; *śīla-ādayaḥ*—高貴な気質など; *guṇāḥ*—性格; *yatra*—～の中に; *tejaḥ*—熟達; *tat*—その; *icchūnām*—望む者たちにとって; *mānaḥ*—崇敬; *yatra*—～の中に; *manasvinām*—思慮深い人々にとって。

ドゥルヴァ・マハーラージャのこの偉人伝に耳をかたむける者は、ドゥルヴァのような高貴な質を身につけることができる。偉大さ、熟達さ、影響力を求める者にとって、これがその獲得法であり、崇敬されることを望む者にとってもこれこそが正しい方法である。

要旨解説

物質界では、だれもが利益、社会的地位、名声を求めており、まただれもが高潔な人物のすぐれた気質について聞きたいと思っています。偉人が求める野心はすべて、ドゥルヴァ・マハーラージャの活動を述べた話を読み、そして理解するだけで叶えられます。

第４８節

प्रयतः कीर्तयेत्प्रातः समवाये द्विजन्मनाम् ।
सायं च पुण्यश्लोकस्य ध्रुवस्य चरितं महत् ॥ ४८ ॥

プラヤタハ　キールタイェートゥ　プラータハ
prayataḥ kīrtayet prātaḥ

サマヴァーイェー　ドゥヴィ・ジャンマナーンム
samavāye dvi-janmanām

サーヤンム　チャ　プニャ・シュローカッシャ
sāyaṁ ca puṇya-ślokasya

ドゥルヴァッシャ　チャリタンム　マハトゥ
dhruvasya caritaṁ mahat

prayataḥ—強い関心と共に; *kīrtayet*—唱えるべきである; *prātaḥ*—朝に; *samavāye*—交流の中で; *dvi-janmanām*—再誕者の; *sāyam*—晩に; *ca*—もまた; *puṇya-ślokasya*—神聖な名声の; *dhruvasya*—ドゥルヴァの; *caritam*—気質; *mahat*—偉大な。

偉大な聖者マイトゥレーヤが助言する。「朝と晩に、ブラーフマナ、すなわち再誕者の集まりのなかで、強い集中力と関心とともにドゥルヴァ・マハーラージャの気質と行動について聞くべきである」

要旨解説

最高人格主神と献愛者の気質や娯楽の重要性は、献愛者の交流だけをとおして理解できる、と言われています。この節では、ドゥルヴァ・マハーラージャの気質について再誕者の集まりのなかで語りあうよう特に勧められていますが、それは十分な資質をそなえたブラーフマナ、クシャトリヤ、ヴァイシャのことを指しています。とくに、ヴァイシュナヴァという境地に高められたブラーフマナとの交流を求めなくてはなりません。そうすれば、献愛者と主の崇高な気質と娯楽を述べている『シュリーマド・バーガヴァタム』の語りあいも、すぐに効果が発揮されます。クリシュナ意識国際協会はそのために組織されました。この協会ではどこであっても——毎朝、毎晩、いいえ、ほぼ24時間——たえまなく献愛奉仕がつづけられています。この協会にかかわる人たちはだれでもおのずから献愛者になります。多くのカルミー、またさまざまな人々がこの協会に加わり、イスコン寺院の心地良い、そして平安な雰囲気に惹かれる様子をなんども見てきました。この節にある*dvi janmanām*（ドゥヴィ　ジャンマナーンム）は「二度誕生した者の」という意味です。だれでもクリシュナ意識国際協会に加わることができますし、入門を受けて再誕者になれます。サナータナ・ゴースヴァーミーが勧めているように、入門式の手順や権威ある教育を受ければだれでも再誕者になることができます。最初の誕生は両親によって与えられ、二番目の誕生は精神的父親とヴェーダ知識によって為されます。再誕者でなければ、主や献愛者の超越的気質を理解することはできません。そのため、シュードラがヴェーダを研究することは禁じられています。シュードラが学術的知識を身につけても超越的科学を理解することはできません。現在、世界中でおこなわれている教育はシュードラを作りだしているにすぎません。大物科学技術者は大物シュードラだということです。*Kalau śūdra-sambhavaḥ*（カラウ　シュードゥラ・サンバハヴァハ）。カリ・ユガでは、だれもがシュードラです。世界がシュードラの人間だけで構成されているため、精神

的知識が影を潜め、人々は不幸になっています。クリシュナ意識運動は、精神的知識を世界中に広めるために、十分な資格をそなえるブラーフマナを作りだすために始められました。それが人々を幸福にしてくれるのです。

第４９－５０節

पौर्णमास्यां सिनीवाल्यां द्वादश्यां श्रवणेऽथवा ।
दिनक्षये व्यतीपाते सङ्क्रमेऽर्कदिनेऽपि वा ॥ ४९ ॥
श्रावयेच्छ्रद्दधानानां तीर्थपादपदाश्रयः ।
नेच्छंस्तत्रात्मनात्मानं सन्तुष्ट इति सिध्यति ॥ ५० ॥

パウルナマーッシャーンム　シニーヴァーリャーンム
paurṇamāsyāṁ sinīvālyāṁ

ドゥヴァーダッシャーンム　シュラヴァネー　タハヴァー
dvādaśyāṁ śravaṇe 'thavā

ディナ・クシャイェー　ヴャティーパーテー
dina-kṣaye vyatīpāte

サンクラメー　ルカディネー　ピ　ヴァー
saṅkrame 'rkadine 'pi vā

シュラヴァイェーチ　チヒィラッダダハーナーナーンム
śrāvayec chraddadhānānāṁ

ティールタハ・パーダ・パダーシュラヤハ
tīrtha-pāda-padāśrayaḥ

ネーッチハャンムス　タトゥラートゥマナートゥマーナンム
necchaṁs tatrātmanātmānaṁ

サントゥシュタ　イティ　シデハャティ
santuṣṭa iti sidhyati

paurṇamāsyām—満月に; *sinīvālyām*—晦日（かいじつ・月の最後の日・訳者注）に; *dvādaśyām*—エーカーダシーの日に; *śravaṇe*—シュラヴァナの星が現われている間; *athavā*—あるいは; *dina-kṣaye*—ティティ（*tithi*）の最後に; *vyatīpāte*—ある特定の日の名称; *saṅkrame*—月の終わりに; *arkadine*—日曜日に; *api*—もまた; *vā*—あるいは; *śrāvayet*—朗読すべきである; *śraddadhānānām*—聞く気のある聴衆に; *tīrtha-pāda*—最高人格主神の; *pada-āśrayaḥ*—その蓮華の御足に保護を求めて; *na icchan*—報酬を期待することなく; *tatra*—そこに; *ātmanā*—自己によって; *ātmānam*—心; *santuṣṭaḥ*—静められて; *iti*—そうして; *sidhyati*—完璧になる。

主の蓮華の御足に完全に身をゆだねた人々は、このドゥルヴァ・マハーラージャの伝記を報酬など期待することなく朗読しなくてはならない。とくにその朗読は、満月、晦日、エーカーダシーの翌日、シュラヴァナの星が現われたとき、特定のティティ（tithi）の終わり、ヴャティーパータ（Vyatīpāta）の日、月の終わり、あるいは日曜日にすることが勧められている。そのような吟唱は、もちろん好意的な聴衆のまえでおこなわなくてはならない。このような吟唱であれば、語る側と聞く側がともに完成の境地に達する。

要旨解説

職業吟唱家は、自分の胃袋で燃えさかる炎を消すために金を要求するかもしれませんが、本人は精神的啓発も完成の境地も得られません。ですから、職業吟唱家が生計をたてるような『シュリーマド・バーガヴァタム』の吟唱は厳しく禁じられています。最高人格主神の蓮華の御足に完全に身をゆだね、自分や家族の生活を支えるためにすべてを主に依存している人物だけが、主と献愛者の崇高な娯楽の話に満たされた『シュリーマド・バーガヴァタム』の吟唱によって完成の境地に到達することができます。その方法は次のように要約できます。「聴衆が『シュリーマド・バーガヴァタム』のことばを受けいれる気持ちを持っていること、そして吟唱者は完全に最高人格主神に身をゆだねていること」。『シュリーマド・バーガヴァタム』の吟唱が仕事としてなされてはなりません。適切な方法でなされれば、吟唱者が完全な満足を得るだけではなく、主も吟唱者と聴衆に心から満足し、こうして双方が、このような聞き方をとおして物質的束縛から解放されます。

第５１節

ज्ञानमज्ञाततत्त्वाय यो दद्यात्सत्पथेऽमृतम् ।
कृपालोर्दीननाथस्य देवास्तस्यानुगृह्णते ॥ ५१ ॥

ギャーナンム　アギャータ・タットゥヴァーヤ
jñānam ajñāta-tattvāya

ヨー　ダデャートゥ　サトゥ・パテヘー　ムリタンム
yo dadyāt sat-pathe 'mṛtam

クリパーロール　ディーナ・ナータハッシャ
kṛpālor dīna-nāthasya

デーヴァース　タッシャーヌグリフナテー
devās tasyānugṛhṇate

jñānam—知識; *ajñāta-tattvāya*—真理を知らない人々に; *yaḥ*—～である者; *dadyāt*—授ける; *sat-pathe*—真理の道で; *amṛtam*—不滅; *kṛpāloḥ*—親切な; *dīna-nāthasya*—貧しき者の保護者; *devāḥ*—半神たち; *tasya*—彼に; *anugṛhṇate*—祝福を与える。

ドゥルヴァ・マハーラージャの伝記は、不滅の境地に到達するための神聖な知識であり、絶対真理者について知らない人々がその知識によって真理の道を歩くことができるようになる。崇高な親切心ゆえに貧しき生命体の主人・保護者となる責任を負う者たちは、おのずと半神たちの利益と祝福をさずかることができる。

要旨解説

Jñānam ajñāta（ギャーナンム　アギャータ）は、「全世界の人々にほとんど知られていない知識」を指しています。だれも絶対真理者の正体を知りません。物質主義者は、教育、哲学的推論、科学的知識を発達させたことをたいへん誇りに思っていますが、じつは絶対真理者の正体をだれひとりとして知りません。ですから偉大な聖者マイトゥレーヤは、人々に絶対真理者（*tattva*・タットゥヴァ）について知らしめるために、献愛者は『シュリーマド・バーガヴァタム』を全世界に広めなくてはならない、と助言します。シュリーラ・ヴャーサデーヴァは、科学的知識であるこの偉大な書物を編纂しましたが、それは一般の人々が絶対真理者についてなにも知らなかったからです。『シュリーマド・バーガヴァタム』の冒頭・第1編では、大聖者ヴャーサデーヴァは一般大衆の無知を根絶させるためにこの偉大な『バーガヴァタ・プラーナ』を編纂した、と言われています。ヴャーサデーヴァは、人々が絶対真理者について知らないからこそ、この『シュリーマド・バーガヴァタム』をナーラダの教えにもとづいて作ったのです。ふつう、真理に興味がある人たちは推論に頼るために、辿り着ける理解は非人格のブラフマンまでにかぎられます。しかし、ほとんどの人たちは人格主神のことをほんとうには知りません。

『シュリーマド・バーガヴァタム』の吟唱は、とくに、人々に絶対真理者・最高人格主神について啓発するためにあります。非人格的ブラフマン、局所的パラマートマー、至高の人物という理解に根本的な違いはないのですが、じっさいの不滅の境地に到達するには至高の人物と交流する境地にいなくてはなりません。至高主に私たちを導く献愛奉仕こそが、真の不滅の境地です。純粋な献愛者は堕落した魂たちを深く哀れみ、また一般大衆にひじょうに親切に接し、*kṛpālu*（クリパール）とも呼ばれています。そしてかれらは、このバーガヴァタの知識を全世界に広めます。優しい心を持つ献愛者をディーナ・ナータ（*dīna-nātha*）、すなわち貧しき者の、そして無知な大衆の保護者といいます。主クリシュナもディーナ・ナータ、または哀れな生命体のほんとうの友人・ディーナ・バンドゥ（*dīna-bandhu*）としても知られていますが、主の純粋な献愛者もディーナ・ナータという同じ立場をとります。献愛奉仕の道を説いているディーナ・ナータ、すなわち主クリシュナの献愛者たちは、半神たちの寵愛を受けます。多くの人が物質的恩恵をさずかろうと半神崇拝、特に主シヴァを崇拝していますが、『シュリーマド・バーガヴァタム』の決まりに従って献愛奉仕の原則について教えている純粋な献愛者は、とくに半神を崇拝する必要はありません。半神は、献愛者が

していることを喜んでいますし、自分の能力の許すかぎりその献愛者に祝福をさずけます。木の根に水を注げば葉や枝におのずと水がゆきわたるように、主に穢れのない愛情奉仕をすれば、主の体の幹、枝、葉、すなわち半神たちもその献愛者の活動に喜び、あらゆる恩恵を注いでくれるのです。

第５２節

इदं मया तेऽभिहितं कुरूद्वह
　　ध्रुवस्य विख्यातविशुद्धकर्मणः　।
हित्वार्भकः क्रीडनकानि मातु-
　　र्गृहं च विष्णुं शरणं यो जगाम ॥ ५२ ॥

イダンム　マヤー　テー　ビヒヒタンム　クルードゥヴァハ
idaṁ mayā te 'bhihitaṁ kurūdvaha

ドゥルヴァッシャ　ヴィキヒャータ・ヴィシュッダハ・カルマナハ
dhruvasya vikhyāta-viśuddha-karmaṇaḥ

ヒトゥヴァールバハカハ　クリーダナカーニ　マートゥル
hitvārbhakaḥ krīḍanakāni mātur

グリハンム　チャ　ヴィシュヌンム　シャラナンム　ヨー　ジャガーマ
gṛhaṁ ca viṣṇuṁ śaraṇaṁ yo jagāma

idam—これ; *mayā*—私によって; *te*—あなたに; *abhihitam*—説明された; *kuru-udvaha*—クル家の偉大なる者よ; *dhruvasya*—ドゥルヴァの; *vikhyāta*—非常に名高い; *viśuddha*—非常に純粋な; *karmaṇaḥ*—〜の活動; *hitvā*—捨て去って; *arbhakaḥ*—子ども; *krīḍanakāni*—おもちゃや遊び道具; *mātuḥ*—母親の; *gṛham*—家庭; *ca*—もまた; *viṣṇum*—主ヴィシュヌの; *śaraṇam*—保護; *yaḥ*—〜である者; *jagāma*—行った。

ドゥルヴァ・マハーラージャの崇高な活動は全世界に知れわたり、そのすべての活動がこのうえなく純粋である。子どものころ、おもちゃや遊び道具をすべて捨て、母親の保護のもとを離れ、真剣に最高人格主神ヴィシュヌに身をゆだねたそのドゥルヴァ・マハーラージャについて、これまで詳細に説明してきた。ゆえにヴィドゥラよ、私はここでドゥルヴァの伝記を終えたいと思う。

要旨解説

チャーナキャ・パンディタが言っているように、だれにとっても人生は確かに短いものですが、正しいおこないをする人物の名声はのちの世代に受けつがれます。最高人格主神クリ

シュナが永遠に名高いように、主クリシュナの献愛者の名声にも終わりがありません。ですから、ドゥルヴァ・マハーラージャの活動についてこの節で２つの特別のことばが使われています。*Vikhyāta*（ヴィキャータ）「ひじょうに名高い」と*viśuddha*（ヴィシュッダハ）「超越的」です。ドゥルヴァ・マハーラージャが幼いころに家庭を離れ、森で最高人格主神に身をゆだねた事実は、この世界でしめされた比類なき例証です。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第４編・第12章、「ドゥルヴァ・マハーラージャ、神のもとに帰る」の要旨解説を終了します。